

シ
名川章
無藤隆
門脇厚司
編著

ISBN4-487-75742-8

C0037 ¥3000E

定価：本体3000円（税別）

東京書籍

迷走する現

現代とは

学校教育の再

どのよう

学びの新たな
教育方法をどのよう

教育環境の
社会は
いか

9784487757428

1920037030001

21世紀の
教育と
子どもたち

1

迷走する現代と子どもたち

谷川彰英
無藤隆
門脇厚司

編著

東京

谷川彰英
無藤隆
門脇厚司

編著

21世紀の
教育と
子どもたち

1

迷走する現代と
子どもたち

東京書籍

- 柏木博他「都市空間の感性」TBSブリタニカ 一九九二年。
- 稲垣功一・川本三郎「記憶都市」白水社 一九八七年。
- 川本三郎「都市の感受性」筑摩書房 一九八四年。
- 川本三郎「微熱都市」白水社 一九八五年。
- 川本三郎「都市の風景学」駁々堂 一九八五年。
- 川本三郎「シングル・デイズ」リクルート出版 一九八七年。
- 川本三郎「感覚の変容」文芸春秋 一九八七年。
- 如月小春「都市民族の芝居小屋」筑摩書房 一九八七年。
- 清水賢一「漂流する少年たち」恒星社厚生閣 一九九七年。
- 倉沢進・町村敬志編「都市社会学のフロンティア・1」日本評論社 一九九二年。
- 小林紀晴「東京装置」幻冬社 一九八八年。
- 佐伯啓思「シミュレーション社会の神話」日本経済新聞社 一九八八年。
- 佐藤学「教育改革をデザインする」岩波書店 一九九九年。
- 篠田浩一郎「都市の記号学」青土社 一九八六年。
- 清水克雄「文化の変容」人文書院 一九八七年。
- 高倉純一「都市と青年」公論社 一九八五年。
- 高橋勝「子どもの自己形成空間」川島書店 一九九二年。
- 高橋勇悦・下山田裕彦編「子どもの〈暮らし〉の社会史」川島書店 一九九五年。
- 中森明夫「東京トンガリキッズ」JICC出版局 一九八七年。
- 野田正彰「都市人類の心にくぐえ」日本放送出版協会 一九八六年。
- 日野啓三「天窓のあるガレージ」福武書店 一九八二年。
- 日野啓三「都市の感触」講談社 一九八八年。
- 日野啓三「都市という新しい自然」読売新聞社 一九八八年。
- 藤田英典「教育改革」岩波新書 一九九七年。
- 松葉一葉「東京発・都市の現在」駁々堂 一九八八年。
- 松山巖「都市という廃墟」新潮社 一九八八年。

静岡大学教授 馬居政幸



消費社会の子どものゆぐえ

——「子ども文化」の変容——

第5章



1……進む消費社会と子ども文化への視点

旧世代、新世代、X世代、N世代

私はソウルオリンピックの年（一九八八）に訪韓して以来、韓国の都市に育つ子どもたちや若者の変化について、マンガに代表される日本文化の浸透度とかかわって継続的に調査を実施してきた。そのスタート時の九〇年代前半において、青少年教育関係者あるいは中・高校生や大学生へのインタビュー調査の過程で、必ずといってよいほど耳にしたのが「新世代」という言葉であった。

「新世代」とはいうまでもなく「旧世代」に対する言葉である。では「旧世代」とはどのような人たちなのか。日本占領期に止まらず、日本の敗戦（四五年）によ

る解放後の南北分断と朝鮮戦争（五〇〜五三年）で破壊された国土と生活を再建し、朴正熙大統領のもとで「漢江の奇跡」と呼ばれる高度経済成長を担った人たちである。その活力の源は伝統的な儒教倫理と苦難の近代史に起因する恨（その対象は日本や朝鮮民主主義人民共和国）といえよう。

それに対して、七〇年代から八〇年代にかけての経済成長とソウルオリンピックを契機に実施された民主化政策の相乗効果により、過去の貧しさや伝統文化に距離をおく（相対化できる）意識や行動をとる新たな世代が生まれ育ってきた。彼ら彼女らは、儒教倫理よりも欧米的合理主義（韓国文化のフィルターを通してはいるが）の価値を上位におき、豊かな日本社会とその現代文化へのあこがれも隠さない。これが「新世代」と名付けられる理由である。

ただし、「新」とは「旧」に対応する言葉であり、「旧」の存在があつて初めて「新」の特性が明らかになる。その意味で、外国人である私の五感を通して感得する「新世代」とよばれた人たちの意識や行動のなかに、父母や祖父母の生活様式や恨を通じて過去の倫理と苦難の歴史は確実に生きていた。たとえば、「新世代」の語る言葉から、一面では、新たな価値のもとに自己を主張しているかにみえても、その多くは「旧世代」の意識や行動の否定もしくはその問題点を指摘することによって、自分たちの新しさを際立たせようとしているとしかかえることもできた。さらに、日本からきた私に対して、まず問い掛けてきたのは、日本の過去に対する疑

問符であった。また他方で、日本人であると同時に大学教師でもある私の前では、いかに勧めても喫煙する学生はいなかった。酒席をともにしても、私の正面で杯を交わすことはなかった。そして、私の鞆を奪うようにして持ち、自分の指導教授と同様に、先生(師匠)に対する学生(弟子)としての態度をくずすことはなかった。東洋の礼儀国の後継者として、両班(ヤンバン)から受け継がれた倫理や行動様式の問題点を言葉では厳しく指摘するものの、事実の上で否定することはできなかったわけである。

ところが、九〇年代後半、子どもから若者へと成長した「新世代」へのインタビューから「X世代」と名付けられた新たな世代が生まれてきていることを知った。自分たちとは異なり、親類縁者のなかに刻印された伝統文化や苦難の歴史にこだわることなく、豊かさを樂しむ後輩たちに向けられたネーミングと理解した。

この世代にとっては、日本も外国の一つにすぎない。リアルタイムで流入するマンガ、ファッション、ファンシー商品、あるいはAV機器から生活用品まで、日本の現代文化と商品を自分と自分たちの世界を表現する道具として積極的に受容、すなわち消費することにためらいはなかった。それは、「新世代」にも受け継がれていた「旧世代」の日本批判とコンプレックスから自由になった、文字通り新たな世代の誕生である。同時に、そのことは、韓国社会が育んできた子どもや若者のあり方を枠付ける伝統的な価値規範や行動様式から自由になる一方で(切り離されて?)、次々と商品棚に並ぶモノとの関係において自己を形成する(せざるをえな

い?) 世代が韓国社会に誕生したことを意味するといえよう。他との対比できない不可解なXというラベルが貼られた理由である。

加えて、この世代に対して、さまざまなマスコミ等を通じて批判的な世論はあるものの、日本に次ぐOECD加盟(九七年)という先進国への仲間入りを誇ることも同様に、韓国社会の豊かさを象徴する現象として、その誕生を韓国社会は容認しているかにみえた。そしてそれは韓国社会に消費文化が根づいたかに思えた瞬間でもあった。

しかし、それはまさに瞬間の現象であった。九七年八月二日、あの前日の香港返還の儀式の感動が覚める暇もなく、タイのバーツ下落に始まるアジアの金融危機は韓国経済を直撃し、年末には実質的な国家財政の破産宣告にまで追い込まれた。その最中、私は年末から年始にかけて韓国主要都市の街頭でインタビュー調査を試みたが、繰り返し語られたのがこれまでの行き過ぎた消費生活(過消費)に対する反省であった。事実、都市中心部での車のラッシュの解消?と平行するかのようには、友人の日本マンガを翻訳出版するソウルの出版社の社長は、子ども向けのマンガ雑誌の発行部数の激減を嘆いていた。この時期、日本も九〇年代始めのバブル崩壊以後の不況と金融危機の真っ只中にいたが、私はこのような韓国の人たちへの取材から、むしろ学生時代に経験したオイルショック(七三年)の時の反応を思い出した。

それから二年後の昨年末、ようやく復調しつつある韓国経済の状況とその回復の

ための施策の一つとされる日本文化解放後の韓国社会の世論の動向、何よりも子どもや若者の世界における変化を改めて調査することを目的にソウルを訪れた。金浦空港から市街中心部への移動中にラッシュに遭遇し、ソウルは再び活気を取り戻しているかを見えた。その内実を確認するために、友人のソウル教育大学教授を訪問し、子どもたちの変化についてうかがった。その結果、再び新たなネーミングの世代が生まれていることを取材できた。それは、友人の中学二年になった長男に対する危惧と期待が入り交じった感情とともに述べられた「N世代」という言葉である。

起源は“neo generation”と“network”の意味を重ねた両語の頭文字Nである。ゲームやインターネットを代表に、部屋に閉じこもってコンピュータに夢中になる世代という意味である。このように表現すると、九〇年代始めの日本において、マスコミの組上りのぼった「おたく」と名付けられた人たちの思い浮かべた方もおられよう。事実、そのような危惧がないわけではないようだ。しかし他方で、高度情報社会を担う新たな世代への期待もまた友人の表情から読み取れた。さらにそこには、日本の影は全くみられない。ただし、ディスプレイの中のサイバースペースには、美国（日本語の米国に相当）とともに日本文化も瞬時にアプローチ可能な情報として存在する。部屋の外の手に触れ、身につけることができる韓国文化よりも身近な世界として。

消費社会の成立

なぜ、日本の子ども文化を論じるべき本稿において、韓国の子ども文化や世代論の紹介から始めたのか。理由は二つある。

その一つは、韓国での消費社会の成立、とりわけ子どもたちの世界にその影響が及ぶ過程は、二重の意味で日本の子ども文化が消費社会化する過程の縮小版と考えられたからである。その二つは、世代論とかわつての子ども文化をとらえる私なりの視点を提示しておきたかったからである。

まず、前者についてだが、私が韓国での継続調査を実施してきたソウルオリンピック以後の約一〇年間とは、まさに韓国社会が消費社会に転換する過程であった。因みに、日本社会の場合は、高度経済成長時代を彩った東京オリンピック（六四年）から大阪万博（七〇年）をへて、オイルショックで一時中断したものの、七〇年代半ば以降、とりわけ「金ピカ時代」の八〇年代に現在の子どもの世界を枠付ける消費社会は形作られたといえよう。それは、高度成長期の重厚長大（工業化）型と総称された鉄鋼、造成、石油プラントに代表される労働集約型の経済・労働・生活構造から、軽薄短小型（情報化）のビデオ、ファクシミリ、コードレスホンに代表される知識集約型の経済・労働・生活構造に転換する過程でもあった。そしてその転換は子どもたちの生活世界を大きく変えていくわけだが、その点については後に詳論する。

それに対して韓国の場合、この日本の定式をなぞるかのようになり、七〇年代から八〇年代の高度経済成長の成果をソウルオリンピックで飾り、その五年後に開催された大田（テジョン）科学博でより確実なものにする施策がとられた。それが今回のアジア経済危機によって頓挫しかけたものの、今、再び羽ばたこうとしている。加えて、この韓国社会における消費文化の展開は、情報化の段階に入った日本社会の変化の影響をリアルタイムで受けることになる。ということは、韓国においては重厚長大から軽薄短小型への変化が、日本とは異なり、途中から重なり合って進行するということになる。その象徴が科学博として開催された大田万博である。それは日本での大阪万博から筑波科学博への過程がカットされ、労働集約型の性格を残したまま知識集約型の社会への転換が進行することを意味し、工業化に伴う問題と情報化に伴う問題が重なって生じることを示唆しているといえよう。私が九七年末の金融危機の際に訪韓して、実際には情報化の段階に生じた問題にもかかわらず、韓国の人たちの対応が、日本のオイルショック時（工業化の段階）の対応に似ていると感じた理由でもある。

その意味で、子どもたちの世界を消費文化が覆うことによって生じる特性や問題点もまた、コンパクトに現れる。さらに、それは工業化から情報化に伴う変化という意味での日本と韓国に共通する通文化的な側面と韓国文化に日本文化が流入することによって生じる個別文化的な問題という二つの側面が混在したものととして把握

できよう。これが先に、「二重の意味で日本の子ども文化が消費社会化する過程の縮小版」と述べた理由である。そしてそのことにより、一つは、子どもたちの世界に消費文化が生まれ、形成され、根づく過程を、日本とほぼ同型でそれも短縮してなぞることができること。もう一つは、リアルタイムで流入する日本の現代文化、いいかえれば日本の消費文化との関係で生じた現象である以上、日本の子ども文化の課題もまたコンパクトに把握できると考える。

そこで次に、上述した韓国の世代論の変遷から、消費社会とそこに生きる子どもたちの文化の特性について整理しておきたい。

消費文化の特性

まず、消費社会に生きる子どもたちの文化の特性は、韓国の「新世代」から「X世代」への変化に読み取ることができる。それは消費という行為が、生を維持することを代表に、消費の対象となる商品が持つ直接的な機能の必要性ではなく、自己の社会的位置を象徴する記号を獲得するためのものに変わることである。たとえば、音楽を聞くという機能を重視するのみならず、レコード、テープ、CD、MDと次々と新たな技術の開発に伴って商品化される再生機器を買い続ける必要がどこまであるのか。まして、ウォークマンに始まる小型再生機を、それも非常に細分化された機種のかなから選んで、わざわざ人目にふれるところでこれみよがしに携帯する必

要件はどこにあるのか。おまけに、TPOに応じたファッションとセットで表現するのは何故なのか。このように考えれば、消費という行為とその前提となる意識が意味する世界を想像できよう。

すなわち、消費社会においては、消費により獲得する物が記号になるばかりではなく、消費する行為自体が自己の存在証明であり、アイデンティティの中核を形成するための記号表現となる。それは、何を着て、何処で、誰と、いつ、どのような言葉使用で、どんな気分でということが、全て消費行動とセットで位置づけられることを意味する。いいかえれば、消費社会とは、消費行動自体が自己の位置を確認する記号の集積になる社会であり、人が自分が何者かを明らかにするために、何らかの商品を獲得しなければならぬ社会でもある。何を購入するか、という行為が、自分がどのような人間か、ということと密接不可分の社会ともいえる。

もともと、何らかのモノの交換あるいは交換する様式や交換されたモノの使用方法が、所属する世界を表現する記号になるということ自体は、いずれの社会にも存在する。ただし、その記号表現は、その社会に所属する人たちを特定の位置に固定するためのものである。また、記号によって固定する社会的位置の配分様式自体は、通時的に変更不能なものとして、世代間の学習（社会化）の対象となる。だが、消費社会は、その社会的位置を示す記号がだれもが購入可能な商品となることによつて、自己の社会的位置を確認するために商品を消費し続けなければならない。

ただし、消費社会化が進行する以前に自己を形成したものにとつては、消費社会は、一面では新たな社会的位置への移動を容易にする開かれた社会となる。消費は選択の問題であつて、新たな社会的位置を求めなければ、商品を消費する必要はないからである。

しかし、消費社会に生まれ育つ者にその選択肢はない。自己を形成する過程にある子どもたちにとつては、何を買う、何を持ち、何を来て、何を飾るかということとを離れて自分を表現する選択肢を見つけないことは困難になる。全てが商品とかわつて、それもどこで、どのように、誰と買うかが、自分とは誰なのか、という問いへの答えとなるからである。消費という行為が、自己を明らかにする過程それ自体となる。

「新世代」にとつて、アイデンティティの源は「旧世代」であり、その違いを強調するための日本文化や商品への消費行動であつた。その意味で、消費文化を内在化した最初の世代といえなくもない。だが、その価値意識も行動様式も、基本的には「旧世代」を引き継いでいた。それに対して「X世代」は、先に紹介した「日本の現代文化と商品を自分と自分たちの世界を表現する道具として積極的に受容、すなわち消費すること」との特性が示唆するように、アイデンティティの中核に消費行動が組み込まれた世代といえよう。「新世代」から「X世代」への転換が消費社会の成立とした理由である。

このような消費文化を内在化する自己形成の過程とは、一方で過去の伝統に閉ざされた世界からの解放を意味する。だが、他方で、消費社会は、良くも悪くも、長い年月をかけて培ったその社会に適した人になるための文化（発達課題）の枠組みを崩壊させる。その結果、そこで生まれ育つ者に対して、幼児期から思春期を経て一人の人間として自立する過程において獲得すべき課題自体を流動化させる。次々と生まれては消えていく商品との関係を自己形成の過程にとりこまざるをえない以上、そのアイデンティティもまた自由との引き換えに安定性を失わざるをえないからである。

私が、「X世代」について、「韓国社会が育んできた子どもや若者のあり方を枠付ける伝統的な価値規範や行動様式から自由になる一方で（切り離されて？）、次々と商品棚に並ぶモノとの関係において自己を形成する（せざるをえない？）世代」と、それぞれ疑問符を付記して表現した理由である。加えて、「他との対比できない不可解なXというラベルが貼られた理由」と記したが、この「不可解」という性格は他の世代にとつてのみでなく、消費文化として子ども文化を形成せざるをえない社会に生まれ育った「X世代」が自らに問い続けなければならない課題でもある。

しかし、たとえ次々と変化するとはいえ、商品である以上、少なくとも手に取って身につけることはできる。それに対してボーダーレスなサイバースペースに遊ぶ「N世代」の場合はどうか。選択肢はワールドワイドに広がるものの、いかにリア

ルな3Dであろうと生身の自己との距離は無限であり、その間を埋めることは原理的に不可能である。「N世代」にとつての不可解さへの問いは、「X世代」の比ではないと言わざるをえない。

ただし、韓国社会における変化の速さは、一方で、世代間の差を際立たせるものの、他方で、伝統的な規範を内在化した先輩（「新世代」）が身近に存在することでもある。何よりも、韓国社会の中心部分を構成するのは「旧世代」であり、その中核となる価値規範が長幼の序に代表される儒教倫理である以上、文化の基層には今なお安定した規範が岩盤の如く存在し、それが九七年の金融危機を克服する上で積極的に機能したといえよう。私がオイルショック時の日本との類似性を指摘した理由である。

その意味で、「新世代」のみでなく「X世代」と「N世代」もまた、不可解さへの問いを解くための「意味ある他者」を獲得することはそれほど困難ではないはず。しかし、日本の子どもたちの場合はどうだろうか。答えは自ずと明らかであろう。既に八〇年代に「X世代」の段階を迎え、九〇年代初めには「おたく」と表される「N世代」の問題をマスコミが競って取り上げた日本社会に育つ子どもたちの課題について考察を進めたいが、その前に、このような世代論を用いて分析する私なりの方法論上の意図と日本社会の世代を分ける基準について論じておきたい。

子どもとその文化への視点

私は先に、韓国の世代論を取り上げた理由の二つ目として、世代論とかかわって子ども文化をとらえる視点の課題を提示するため、と述べた。あえていうまでもなく、特定の時代と社会での経験を共有するひとまとまりの年齢層に対して、共通の特性を示唆するラベルを貼る世代論は、韓国社会に固有のものではない。たとえば、クリントン大統領が誕生したときに紹介された米国のベビーブーマーがその典型であろう。日本の団塊の世代、新人類、団塊ジュニア（いちご世代）も同様である。

このような世代論に対して、性差、地域差などを無視し、本来多様なはずの一人一人の個性を一元化させるとして、研究方法上問題視されることが多かった。しかし、わずか一〇年ほどの間に「新世代」「X世代」「N世代」と変化する韓国社会での世代論を取材してきて、私は逆に、韓国の人たちの世代という概念（コンセプト）に込めた思いから、多様性を前提とした人と文化を理解するための二つの視点を学びとった。

その一つは、新たに生まれ育つ者を、常に異なる文化に生きる者として位置づける視点である。異文化理解の課題はいずれの文化も等価であり、自己の文化を基準に相手の文化を理解しないこと。世代論に即せば、可能な限り新たに生まれ育つ者の側に立って、その意識や行動を理解することが求められる。その二つは、文化の特性をそれを担う人たちが生きる「場」の変化とセットでとらえる視点である。新

たな世代の特性を、それを生み出すさまざまな社会的条件や社会的文脈と関連させつつ理解できるかどうかである。圧倒的な力を持つ「旧世代」に対して、「新世代」の言動不一致に注目するよりも、急激に変化する社会に向かって新たな生きかたを模索する過程にその特性を求めたい。溢れる商品を前にして、スティックに生きることを拒む「X世代」の倫理感を非難するより、限られた小遣いを駆使して、自らを表現しようとする抜け目なさこそ、その世代と特性ととらえたい。これが韓国の世代論から学んだ子ども文化に対する私の視点である。

あえてこのような視点を強調するのは、私の偏見かもしれないが、日本において子ども文化が論じられる際に、次の二つの前提があるように思えてならなかったからである。まず、子ども文化という概念（コンセプト）自体に、時代を越えたプラスイメージの価値が付加されなければならない、という前提である。さらに、その前提にはいりがちである、ということである。もちろん、社会認識の基本原理として、いかに厳密な科学的手順をふもうとも、論者の価値観から自由になる認識はありえない。むしろ、積極的に自己の価値を明示することによって、認識の妥当性は確保される。しかし、それは自己の価値観と認識対象の価値観を等価におくことが前提でなければならぬ。

人は真空のなかに生まれ育つわけではない。文化はそれを担う人とその生きる場

から離れて存在しえない。逆に、文化は人が生きようとする場がある限り必ず生み出されるものである。その開示を試みる知的謙虚さから子ども文化研究は始まると考える。ただし、そのことは現在の子ども文化に問題がないということでもなければ、今育ちつつある人たちが克服すべき課題がない、ということでもない。安易な同調や無責任な価値評価は、かえって子どもたちの世界を歪めることになることもまた自戒を込めて指摘しておきたい。

以上のことを前提として、韓国の子どもたちよりもより徹底した消費社会に生きる現代日本の子どもたちとその文化の特性に目を向けたい。そのための準備として、改めて韓国の世代論の対比として、現在の日本の子どもたちの特性を基礎付ける社会的条件を、出生数の変化と人口コウホート(世代論)の視点を加味しつつ、整理しておきたい。

2

子ども人口の変遷から見た子ども文化の変容

出生数の二つの山と谷

平成元年の一・五七ショックを契機に、子どもが少なくなるという社会的事象と

の関連で様々な問題が論じられるようになった。だが、少子化は今に始まったわけではなく、日本は既に六〇年代から二人子の時代になり、合計特殊出生率(女性が生涯にわたって産む子ども数の平均値)が一・三八(九八年)になった現在も、一家に二人の子どもという傾向に大きな変化はない、といった少子化の実態について、正確に理解されているとは思えない論議(その代表が現在を一人っ子の時代と勘違いする)がままみられる。その結果、子どもとその文化との関係についても、市場の増減から成長過程の変質まで、子ども文化が消費文化に変容する過程で最も基盤となる子ども数の増減(一方的な減少ではない)がもつ意味について未だ合意形成がなされていないのではないか。そこで、ここではまず、戦後五十年をふりかえり、現在の少子化にいたる出生数と出生率の変化とその社会的背景について整理するとともに、韓国の世代論との対比から日本の子ども文化の変容を把握する方法として、人口コウホートの観点を加味した「団塊の世代」「少産世代」「団塊ジュニア」「少子世代」という四つの世代の特性を提示してみたい。

図1は戦後の子ども数の出生数と合計特殊出生率の変化を示したものが、四九年の二七〇万人と七三年の二〇九万人をピークとする二つの山と谷があることが理解されよう。前者の山が、出生時はベビーブームと呼ばれ、現在は「団塊の世代」との名称で知られる人口の最も大きな固まりである。後に改めて整理するが、戦後の

消費文化の最初の洗礼を受けたこの世代も既に五十代、今や産業構造の変動に伴うリストラの対象として、新たな時代に向けて、幾度めかの転身を模索中である。

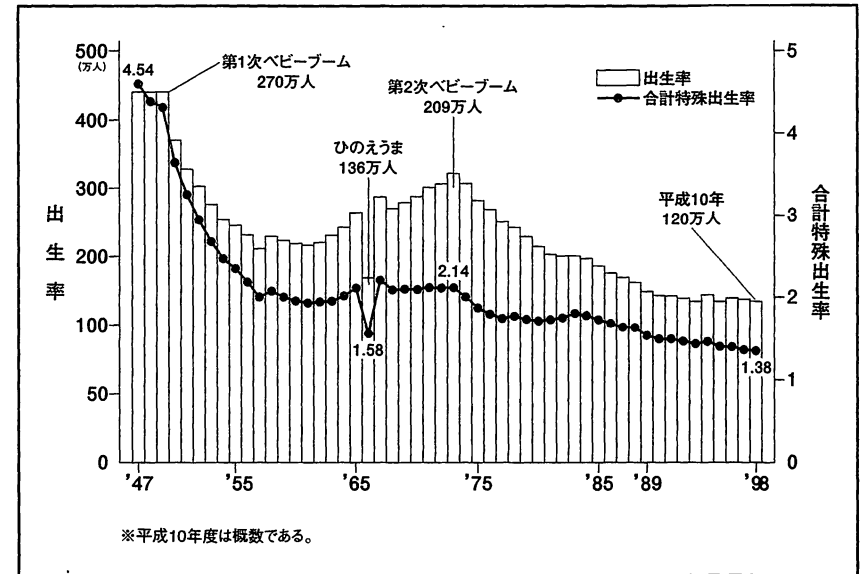
二つ目の山（第二次ベビーブーム）は、「団塊の世代」の二代目（正確にはズレがあるのだが、同じ人口の固まりという意味も込めて）として、現在、二〇代後半になった「団塊ジュニア」である。

「団塊の世代」と「団塊ジュニア」には生まれた谷である六〇年前後する時期、出生数は非常に減少する。この減少は現在の少子化と異なり、意図的（政策誘導的）に出生数を減らした（少産化）結果である。この六〇年前後する少ない子どもたちこそ、かつて新人類と名付けられた人たちであり、今その先端が四〇代に届こうとしている。この世代をここでは次の「少子世代」との対比で「少産世代」と名付けた。

この「少産世代」が成人し、子どもを産む年代に達したときに生じた現象が現在の出生率低下の問題である。すなわち、現在の少子化は戦後二度目の谷であり、合計特殊出生率の変化をみれば、一つ目の谷である五〇年代の減少幅が遙に大きい。出生数も二七〇万から一五〇万代にまで減少する。一家に子どもが二人という少子家族は六〇年前後に定着し、第二次ベビーブームは出生率ではなく親の増加の結果である。「団塊ジュニア」もまた少子時代の子どもである。

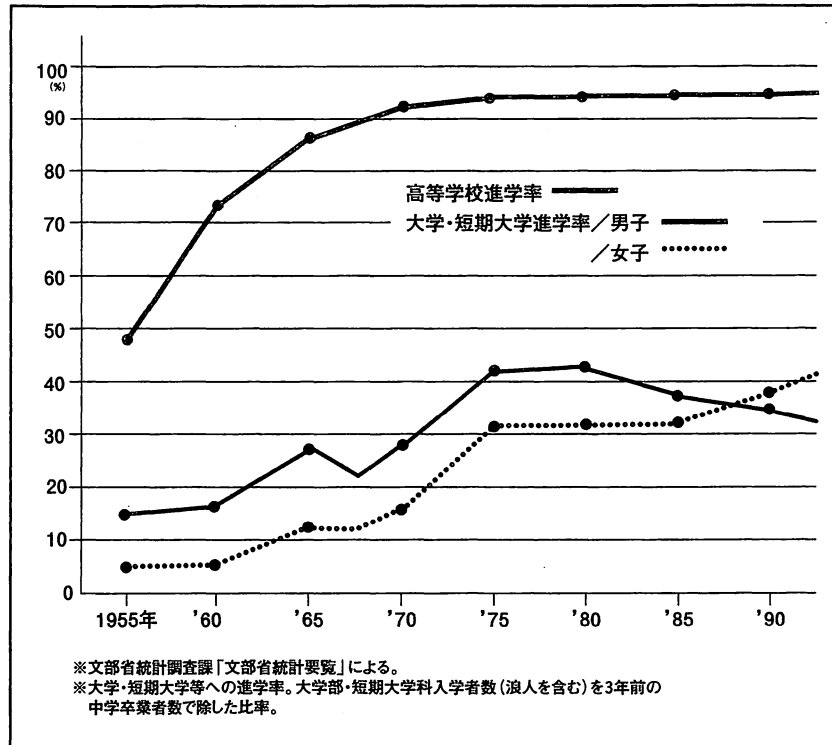
ただし、合計特殊出生率では大きな変化はなくとも、出生総数での「団塊ジュニア

【図1】
出生数及び合計特殊出生率の推移



※厚生省「人口動態統計」より。注：平成10年度は概数である。

【図2】
高等学校と大学・短大進学率の変化



「文部省統計要覧」より。

ア」とその先輩の「少産世代」の間にある差は大きい。その影響は上位学校への進学との関連で子どもの世界を大きく枠付ける社会的条件となる。

誰もが進学する社会に

図2が示すように、高校と大学の進学率は、子どもの出生数の変化とは対照的に、戦後一貫して上昇する。七五年にピークに達して以後、高校は九割以上、大学(含む短大)は四割近くで推移する。加えて、七六年にスタートした専修・専門学校等を含めれば、高校卒業後に進学する者は、同学年の約七割に達している。

この出生数と進学率の変化を重ねるとどうなるか。高校・大学進学率がピークになる七五年の一五年前は六〇年、「少産世代」の誕生と重なる。すなわち、日本の戦後の選抜システムは、子どもが最も少ない時期に確定し、その後に人口の二つ目の山すなわち「団塊ジュニア」が押し寄せたわけである。

受験者の増加に対して進学率を一定に保つためには定員を増加しなければならぬ。定員を一定にするなら別の受け皿が必要になる。前者が高校新設、後者が専修学校等の新設である。他方、進学率の増加が、より高い社会的地位を求めているものがあるなら、学校歴を求める競争の細分化が進行する。すなわち、四年制大学、短期大学、専修・専門学校などの進学する校種の差が卒業後の経済効果や社会的威信の差でランク付けされ、各ランクへの進学可能性で高校のランクが決まり、新設順

に高校が次々と下位にランクされればどうなるか。九割以上の進学率を維持するための高校増設は大学入学可能性の拡大ではなく、進学可能性で序列づけられたトラックの細分化にすぎなくなる。

そのトラックに、年々増加する子どもを一人も落ちこぼすことなく、公平に振り分けるには、誰もが納得する基準が必要になる。そのために、中学校が用いたのが、教科を構成する知識の理解（記憶）量と操作時間の速度の差を一元的に配列した数値（偏差値）であった。教育問題の根源かの如き非難を受ける偏差値は、本来、増加する受験生と中学浪人を出してはならないという社会的圧力のもとで、一五の春を泣かさないう教師の教育愛が要求したことを忘れてはならない。

そしてこのような一五の青春を通過した最初の世代が、今、三〇代後半から四〇代に届こうとしている「少産世代」である。男女ともに多数派が高学歴になった最初の世代であり、新人類と呼ばれて先輩の「団塊の世代」との違いも含めて、その意識や行動の新奇さが注目を集めた。ただし、この世代は進学への圧力はあったものの、「団塊の世代」のあと急減した世代として、進学率の増加と高校・大学の定員増が平行した世代でもある。

それに対して、偏差値による輪切りの圧力を最も受けたのが「団塊ジュニア」である。ただし、生まれたときから覚悟した多数派として、競争への準備を親子ともに用意できた（せざるをえなかった）世代でもある。社会制度の側も、学校や受験

産業など直接受験にかかわる世界のみでなく、子どもをターゲットにするあらゆる産業が「団塊ジュニア」とその親（祖父母や最後の多産世代の父母の兄弟姉妹である叔父叔母も含めて）という巨大な市場での消費を誘因することとセットで、問題解決のための処方箋を準備できた。当事者の「団塊ジュニア」も、受験の世界を、その消費によって自己を表現する商品の一つとして対処するスキルを学習することができた（せざるをえなかった）。

だが、まだ準備が整っていない制度の転換期には予期しない問題が生じる。それが八〇年をピークに全国の中学校に吹き荒れた校内暴力ではなかったか。七五年に高校進学率がピークに達して五年、ちょうど「少産世代」から「団塊ジュニア」へと子どもが増加する中間点に生じた出来事であったからである。この時期の校内暴力の原因について、今なお解明すべき課題が多いと考えるが、少なくとも、本来は多数から少数を選ぶ制度であった義務教育後の選抜制度が、全体を序列化させ、少数者にならないための制度に転換する過程で生じた問題といえるのではないか。成長とともに高まる受験の圧力を、自己の能力を計る尺度というオモテの文化ではなく、次々と消費しては捨てていくウラの文化（サブカルチャー）の準備が整っていなかった世代の思春期における自己をとりまく社会制度との軋轢として位置づけられまいか。

では、二つ目の谷への変化、すなわち「団塊ジュニア」が成人したあと、現在の

「少子世代」に向かつて急激に減少する過程で生まれ育つ子どもたちにとっての社会的条件とは何か。

少子化の先にある社会は

まず、出生総数の減少という量的側面での変化だが、その最も身近な現象が余裕教室の増加に始まり統廃合にまで及ぶ学校規模の縮小であろう。さらにその先に大学全入時代が待っている。リクルートによる進路動向予測では二〇〇九年がその年にあたりとされる。それまで一八歳人口は減少し続けるため、入学率は毎年確実にアップする。加えて、生き残りをかけた大学改革により、大学定員はむしろ増加傾向にある。全入時代はより早まる可能性がある。ちなみに二〇〇九年の大学受験者とは現役なら現在八〜九歳、小学校中学年にいる子どもたちである。そして、厚生省によれば昨年（九九）の出生数は一一七万五千人、最低値を更新し、少子化の波は今なお歯止めがきかない状態である。

他方、少子化は人口の高齢化とセットである。中高年者の増加により終身雇用、年功賃金を基盤とする日本型経営システムは破綻し、能力給（年俸制）による人事・給与体系に転換せざるをえなくなる。そしてそれは、日本型学歴主義の社会的基盤の崩壊をも意味するはずである。終身雇用だからこそ卒業後に入る企業のランクと結びついた大学の銘柄が問題になる。少々犠牲を払っても、銘柄大学に入学で

きれば人生は保障されるからである。

だが、一〇代の一時期に、それもペーパーテストによる既存の知識・技能の記憶度と操作時間の短さを競った結果の証明のみで、毎年新たな査定が要求されるシステムにおいて希望の職場と収入を獲得することは不可能ではないか。まして、能力給になれば、次々と新たな課題に挑戦（意欲）し、その解決能力（個性）を積極的にアピール（表現）することが必要になる。ひたすらペーパーテストに挑むために鍛えた能力は、むしろ不合理であり、機能不全に陥らざるをえない。

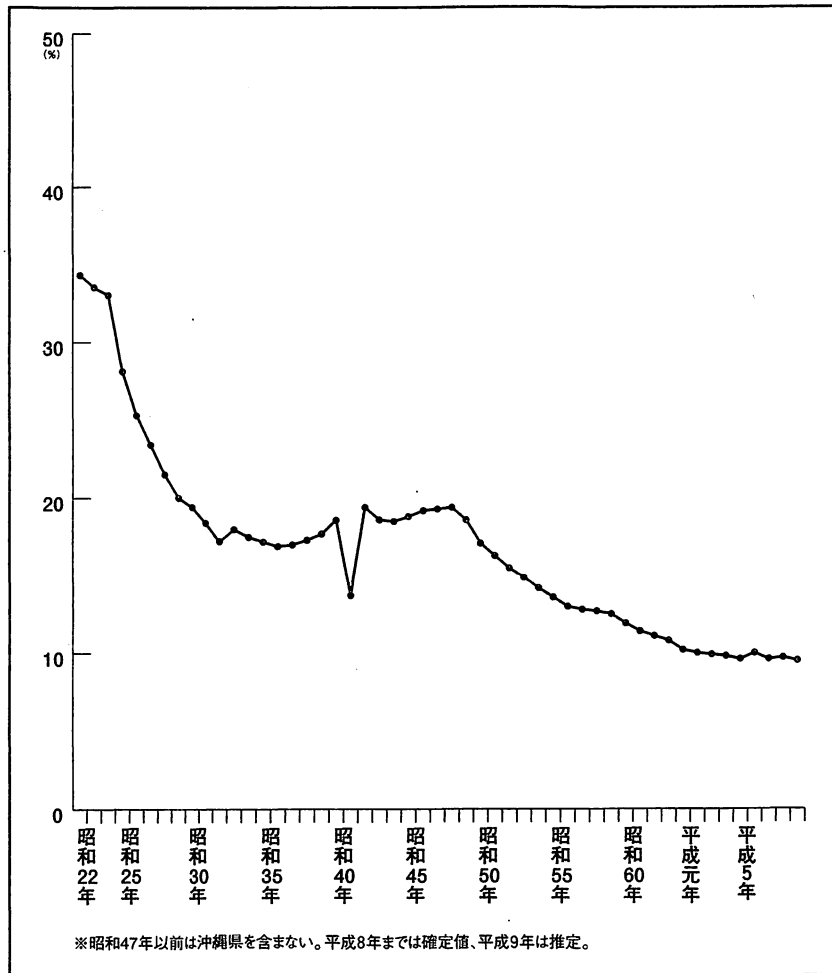
入学率アップも日本型経営システムの転換も二〇〇九年に突然生じるわけではない。それにもかかわらず、幼稚園から進学競争の波に乗せようとするのが何を意味するのか。

これこそ受験という社会的選抜制度が本来の機能を越えて消費の対象になったこと、すなわち、受験に子どもを向かわせるという意識と行動自体が、親の社会的位置を表現する商品として、消費の対象となつているからではないか。問題は子どもではなく親（校内暴力の当事者となった「団塊ジュニア」への移行期の世代も三〇代）である。

この問題については、改めてとりあげたいが、ここでは少子化の質的側面ともいうべき出生率の減少に伴う社会的条件の変化に目を転じたい。

上述したように、厚生省によれば、九九年の出生数は一一七万五千人で、最低記

【図3】
普通出生率（人口1,000対）の推移



厚生省「人口動態統計」より。

録を更新した。合計特殊出生率も当然、前年の一・三八よりも下がるであろう。一・五七ショック以後、毎年のように下がる数値に、マスコミを代表に、一人っ子の時代が到来と思われた時があったが、それは誤りである。合計特殊出生率の分母は出産可能な年齢の全ての女性である。既婚女性のみの統計ではこれまで平均二人を下回ったことはない。見かけ上、二人よりも一人しか出産しない女性の割合が高いことを示す一・三八という数値まで合計特殊出生率が低下した原因は、晩婚化や非婚化の進行により、子どもを生まない（生んでいない）女性が増加したからである。日本の家庭は上述したように、既に六〇年代半ばに二人子が定着して以来、家庭のなかの子どもの数に大きな変化はない。

しかし、その結果、「少産世代」が三〇代になった九〇年代に生まれた子どもは家族は親子ともに二人子となる。これが同じ二人子でも「団塊ジュニア」と「少子世代」をわける特性である。それは現在の少子化の特性が、家の中ではなく、子どもをもつ家庭自体の減少であり、家庭の外（地域）から子どもが消えることを意味する。それを示唆するのが図3の普通出生率（人口千人当たりの出生数）の変化である。

すなわち、人口千人当たりに約三四人生まれた「団塊の世代」のあと「少産世代」に向けて急激に減少するが、「団塊ジュニア」まではそれほど大きな変化がない。ここまでは合計特殊出生率とほぼ同じ変化だが、その後平成元年の一・五七ショック

クの頃に向けて再び大きく下がり、「団塊ジュニア」出生時の二分の一、「団塊の世代」との比較では四分の一にまで減少する。この変化を比喩的に形容すれば、家の中には四人から五人、家の外にも先輩、後輩、仲間がいたるところにいたのが「団塊の世代」である。その後の「少産世代」や「団塊ジュニア」の場合は家の中には二人になり、家の外では先輩や後輩を失ったが、同年令の仲間はいた。だが、現在の「少子世代」は家の中は二人で変わらないが、家の外では仲間をも失った。すなわち、現在の「少子世代」固有の問題は、近所の遊び仲間を失って、学校でしか友達と会えなくなったことである。それは大人の目を逃れて、子どもたちのみの世界と文化（サブカルチャー）を形成する契機（喪失？）を意味する。

しかしこのことは、大人が用意するオモテの文化（さまざまな大人それぞれのサブカルチャーも含めて）を受容する機会の増大につながる。すなわち、彼ら彼女らの親もまた少子家族で生まれ育った男女、祖父母からみれば可愛い息子と娘が生んだより可愛い孫である。その結果、失った近所の友達のかわりに、両親と二組の祖父母の愛情と財布の中身がすぎ込まれる。シックスポケット効果によるハイクオリティチャイルドの誕生と揶揄される現象である。だが、それは大人の都合にあわせた愛情と安全でくるまれた未熟さから子どもたちが逃れないことでもある。そして、彼ら彼女らの親（「少産世代」）やその先輩（「団塊ジュニア」）にもまして、消費社会に育つ子どもたちでもある。それも、韓国の「N世代」と同様に、サイバースペ

ースでの自己形成を免れない。

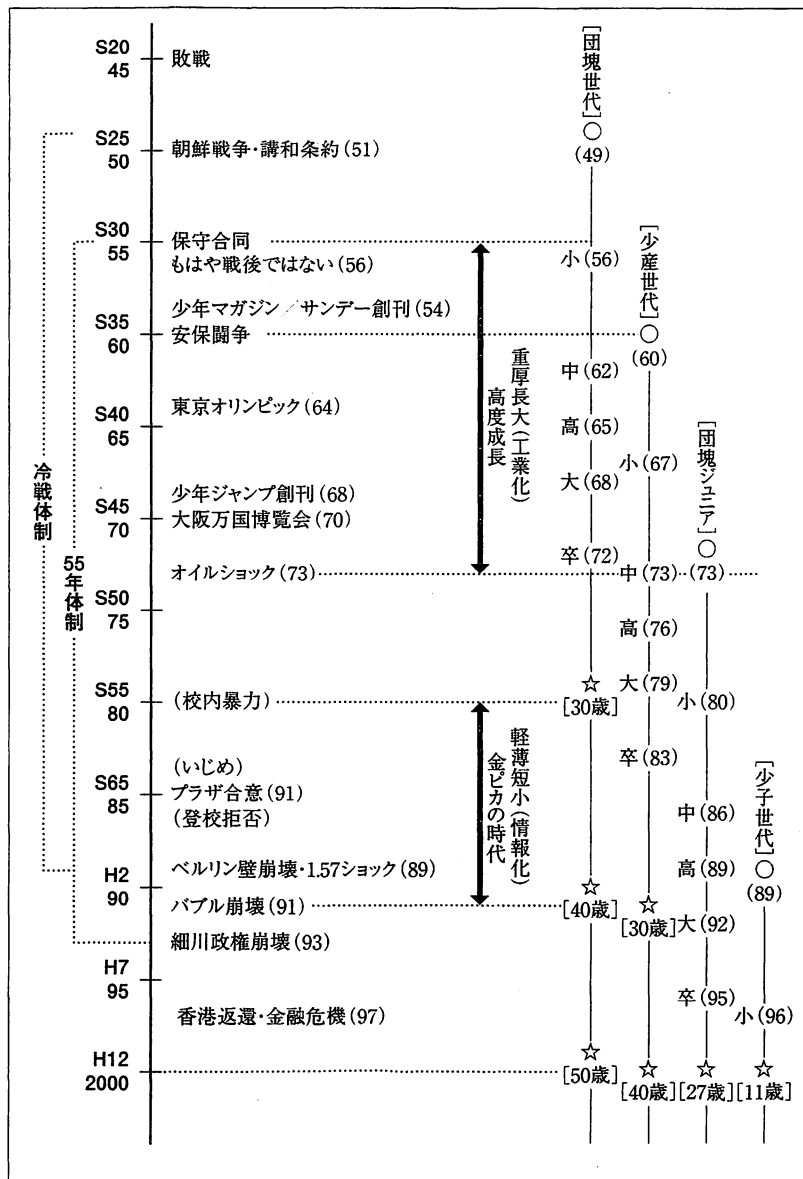
*

以上、出生数と出生率の変化に伴う子ども育つ社会の相違に基づき、四つの世代をとりあげてきた。既に、五〇代に達した「団塊の世代」、四〇歳に届こうとしている「少産世代」、二〇代後半の「団塊ジュニア」はいずれも子どもではない。だが、同時代に生きる者として、相互に関連するとともに、いずれも日本の社会が経済成長とともにそれぞれの段階ではあるが、消費社会に育つ者としての特性を内在化した世代である。そこで、上記の各世代の成長過程を日本の戦後社会の変化に改めて位置づけることから、その世代固有の子ども文化、すなわちサブカルチャーの特性を明らかにしたい。

人口コホート別に見た子どもが生きる世界とその文化の変容

私は先に韓国の三つの世代を分析する上で、日本社会が、五〇年代半ばから始まる高度成長時代の「重厚長大型（工業化）」から、オイルショック（七三年）を経て、同じく経済成長時代ではあるものの、質の異なる「軽薄短小型（情報化）」に転換することにより、経済・労働・生活構造の次元で大きく変化したことを紹介した。その変化を含めて戦後日本を枠付けた世界システムとしての「冷戦体制」、国内システムとしての「五五体制」の始まりと終わりをモデル的に提示し、その変

【図4】
4つの世代の学校歴と年齢一覧



化の節目となった出来事を書き込んだ年表に、四つの世代の誕生から現在にいたるまでの学校歴と年齢を表記したのが図4である。なお、「団塊の世代」は最も出生数の多い四九年生まれ、「少産世代」は谷の底になった六〇年生まれ、「団塊ジュニア」はピークの七三年生まれ、そして少子化が目される契機となった一・五七ショックの当事者の八九年生まれを「少子世代」の代表としてモデル化した。

各世代の特性を、同時代を生きてきたひとまとまりの人口(コウホート)という観点から叙述していきたい。

(1) 団塊の世代

この世代が生まれたあと、日本は韓国戦争を契機に、戦後の世界システムを枠付ける冷戦体制のなかで、講和条約とともに結ばれた日米安保条約のもと、米国の側に所属する国としての歩みを始める。その結果、一方で、平和憲法を盾に軍備ではなく経済成長を優先し、他方で冷戦体制の国内判としての五五年体制のもとで、イデオロギーの対立が様々な次元で判断の尺度となる文化を形成することになる。この戦後日本の二つの特性、すなわち経済成長優先による豊かさ志向とイデオロギー優先による政治意識の高揚はともに団塊の世代を枠付けることになる。

特に、重厚長大型の高度成長の進行とともに小、中、高、大という学校歴を歩み、日本が豊かな社会に変化する過程に自己の成長過程を重ねることが出来る世代であ

る。マンガ読者になりうる小学校の中高学年になったこの世代をターゲットに、少年サンデーと少年マガジンが五九年に創刊されたことが代表するように、様々な商品が子ども文化の中に入りこむとともに、東京を発進源とする情報がリアルタイムで全国の子どもの社会認識を枠付けるようになる。その意味で、消費社会の洗礼を受けた最初の世代である。しかし、その商品を自分で買いそろえるほど小遣いは豊かではなく、テレビを見るために町をさまよった世代である。戦前に自己形成をした親のもとに生まれ育った多産世代の最後として、基本的な生活習慣や生活力においては、貧しさを基調とした伝統的な日本社会の文化を内在化した最後の世代ともいえる。したがって、子ども文化という意味では、貧しい農業社会における多産多死型の戦前の日本社会で培われたサブカルチャーをベースに、新たな消費文化が差し込むなかで、その量の多さもあって、独自のサブカルチャーを形成してきた世代といえよう。その意味で、韓国の「新世代」が「旧世代」を批判しつつも、その意識や行動様式は基本的に「旧世代」を受け継いだものであったのと同様に、「団塊の世代」もまた、その意識と行動様式の表層においては、次々と移り変わる商品を消費する文化をサブカルチャーとして形成しつつも、その基層部分は先立つ世代と同様の構造により枠付けられていた。

その意味で、上の世代から「滅私奉公」から「滅公奉私」に変化したと批判されたものの、六八年をピークとする大学紛争の当事者として、既存社会への批判とい

うこの世代独自の「公的世界」への意識と行動（カウンターカルチャー）を思春期から青春期に内在化する契機を持った。しかし、大衆化が進んだとはいえ、大学進学者は少数派（男二〇〜二五％、女一〇〜一五％）に止まり、その多くは闘争終結（卒業）とともに政治意識を霧散させた。その結果、学歴の高低を問わず、オイルショック後の産業構造と生活構造の改編過程に都市のニューファミリーとして自己（家族）の生活（私的世界）を優先する生活スタイルを選択。冷戦、五五年体制、経済成長優先という大状況（公的世界）への異議申し立てを棚上げし、「金ピカ時代」の八〇年代に多子世代ゆえにかなえることができなかつた消費文化（商品）への自分の夢を託して、二人の子ども（団塊ジュニア）を夫婦で育てようとした。しかし、その内実は家庭よりも仕事（公）を優先する父親と家事・育児（私）を専業にする母親という性別的役割分業を定着させた世代となる。さらに、子どもとの関係では、子育てや教育を「私的世界」の問題として位置づけた。ところが、ベールリンの壁崩壊、冷戦・五五年体制の崩壊、バブル崩壊と、自明であったはずの大状況の崩壊後の新たな時代に適合した「公的世界」を構築できえないままに子どもと分離する年代を向かえた世代といわざるをえない。そして、五〇代になった現在、新たな産業構造の変動と量の多さの圧力によるリストラの波を正面から受け、再び「公的世界」と対峙することにより、超高齢社会の当事者として、改めてその生きかたの改編を迫られている世代でもある。

(2) 少産世代

高度経済成長の成果が全国に拡大する東京オリンピック以後の社会において、都市的生活様式、専業主婦の母親とサラリーマンの父親、学校中心の生活、二人の子ども、という生活様式が定着する社会に生まれ育った最初の世代である。テレビとともに育ち、後に六〇〇万部という驚異的な発行部数を毎週発刊するようになる少年ジャンプの創刊とともに小学校時代を向かえ、テレビやマンガのキャラクターを世代の共通感覚として持つことを代表に、前節で指摘した消費文化を内在化させた最初の世代である。その意味で、韓国の「X世代」と同様の特性をもった世代といえる。「旧世代」との対比で特色づけられる「新世代」と異なり、理解不能な世代という意味で「新人類」と名付けられた理由である。

ただしこの世代は、先輩の「団塊の世代」（カウンターカルチャー）、後輩の「団塊ジュニア」（消費文化）という二つの巨大な人口コウホートには含まれた少数派として、独自のサブカルチャーを形成するパワーを持ちにくい世代である。むしろ、この世代で注目すべきことは、現在の少子化の直接原因となったことであろう。

高学歴、それも女性の高学歴化が飛躍的に進むとともに、卒業時は日本経済絶頂期の八〇年代前半。経済の拡大による労働力不足、情報化の進行と男女雇用均等法による後押しなど、女性の就業が一般化した世代である。その結果、女性が結婚、

子育てという母親コースと仕事のみキャリアコースという道を選択できる（せざるをえない？）ようになった最初の世代となる。しかし、学校の勉強中心に獲得した高学歴を踏み台に仕事中心に生きてきた女性にとって、家事・育児は未経験の世界。おまけに自分を育てた母親をみれば、専業主婦の未来に希望を託すには勇気がある。その必然として晩婚化が進む。日本は結婚後でなければ子どもを産まない社会である以上、もともと少ない少産世代に加えて晩婚化の進行により、子どもを産む女性の数は減少し、出生数も減少する。

したがって、この世代の特性は、「少子世代」の親として、改めて取り上げたい。

(3) 団塊ジュニア

「金ピカの時代」に小、中、高と進み、消費社会の拡大と自己形成の過程を重ねることができると一方で、進学を未だ家庭の事情で阻まれた親の夢を背負って、大学への進学を当然の如く受け入れざるをえなかった世代である。さらに親の世代は社会が消費社会化する過程で、子ども向けの商品が店頭に並びはじめた時代に、乏しき小遣いを工面しても手に入れることができなかつた世代である。だが、そのジュニアは、商品の消費を自己目的化する過程で自己形成をせざるをえない社会的条件のもとにおかれながら、小・中・高と成長とともに強まる偏差値の圧力によって自己規制せざるをえない社会的文脈のもとで思春期を向かえた世代といえる。

しかし、家庭のなかは二人でも、元気な母親による子育てネットワークや隣近所の同級生など、同じ年の仲間を得ることは困難ではなかった。ただし、異年齢の仲間を失った。そのため、同年齢の気の合う仲間を中心とした人間関係が基準である以上、思春期のりこえられても、一人の社会人として自立する上でのモデルを失った最初の世代でもある。

ただし、数の多さはそれ自体がパワーとなる。大人社会が用意する文化に抗して、自分たちの文化（サブカルチャー）をつくることができた最後？の世代といえよう。ただし、それもまた商品消費するという社会過程とセットでしか形成できないのもまた、消費文化に生まれ育ったこの世代の特性である。その代表が少年ジャンプ六〇〇万部という社会現象であろう。ジャンプは大人がつくった商品である。だが、それを六〇〇万という驚異的な発行部数にまで押し上げたのは「団塊ジュニア」のパワーであり、それ自体が学校というオモテ文化に対するカウンターカルチャー、すなわちサブカルチャーであるとして位置づけたい。ただし、少年ジャンプが商品であるという事実がもつこの世代の課題、そして消費文化をアイデンティティのなかに取り込まざるをえない子どもたちの課題については、次節にて考察したい。

(4) 少子世代

少子世代の始まりをどこにおくかにもよるが、とりあえず設定した一・五七シヨ

ックの年をスタートにしても、未だ一一歳。この世代独自のサブカルチャーの特性を明記できる年齢に達しているとはいえない。まして、近年の一・三八あるいはそれ以下の子どもたちがどのような特性をもった世代なのかは不明といわざるをえない。ただし、その生まれ育つ社会的条件については、既に指摘した。

その一つは、韓国の「N世代」に対応する情報社会であろう。さらにより明確なのは共に育つ仲間を失った世代であること。そして、子どもの少なさは親の少なさでもある。加えて、女性として生まれた以上、当然のこととして（選択の余地なく）結婚したこれまでの母親と異なり、仕事にかわって子育てを選択した母親の子どもである。同時に、自らが育つ過程で父や母となるための知識・技能を学習する機会がないままに、学校文化のなかで自己形成し、高学歴と就業が一般化した女性を母に持つ世代である。

生まれて初めて抱く乳児がわが子という親のもとで、おしめ、離乳食、子育てマニュアル、そして公園デビューの教則本まで、全て商品化された世界での子育てが一般化する。その一方、母親の孤立化が進行し、隣近所から隔離されたアパートの一室での母親のみの子育てが珍しくない。育児ストレスから育児ノイローゼ、さらには虐待というコースにだれもが陥る可能性があるなかでの子育てでもある。^{注5}

九〇年代半ば以降、学級崩壊を代表に、この世代が小学校に入学する頃から、新たな問題点が指摘されるようになっていく。しかし、それらは世代の問題というよ

りも、六〇年代に意図的に推進した少産化の結果、当然起こりうる課題について、社会の仕組みの側が準備してこなかった結果生じた現象ではないだろうか。次々に入学してくる多くの子どもたちに、できるだけ効率よく一定の知識を教授することを目的に制度化した学校教育をそのままにして、友人関係すらつくる機会を与えられなかった子どもたちを受け入れることができるとしたこと自体が問題といえまいか。

先に私見を提示したように、「少産世代」から「団塊ジュニア」に移行する過程にあった世代と、変化への対応を準備してこなかった制度や文化との軋轢によって、全国の中学校で校内暴力が頻発した。それと同様に、近年の中学生による旧来の常識では理解できない犯罪は、「団塊ジュニア」から「少子世代」への移行期故に生じたものなのか。それとも、仲間を失った「少子世代」に内在する問題の始まりなのか。あるいは、いじめや不登校を含め、「団塊ジュニア」からつながる消費文化の行き着く先にあるものなのか。

これらの課題を念頭におきつつ、次に「少産世代」に始まり「団塊ジュニア」の子ども時代に本格化する消費社会での子ども文化の特性を、その成立期に逆上って考察したい。さらに、「団塊ジュニア」から「少子世代」へと変化する過程にある現在の中高校生の意識特性に目を向けることから、今育ちつつある少子世代の課題を提示してみたい。

3

サブカルチャーとしての子ども文化の特質

消費文化はサブカルチャーになれるか

前節で、消費文化としての子ども文化は、「金ピカの時代」の八〇年代に形成されたこと。それは「団塊ジュニア」の自己形成の過程と重なるとともに、「団塊ジュニア」はサブカルチャーとしての子ども文化を独自に構築した最後の世代になるかもしれないことを示唆した。

消費の対象が商品である以上、消費文化は大人の手を介さざるをえない。その意味で、消費者の立場しかとりえない子どもにとって、消費社会で自分たちの文化を築くことは、非常に困難になる。おまけに、高学歴化は子どもの世界のすみずみまで学校文化を浸透させる。学校文化もまた大人が用意した文化である。

そのため、冷戦体制が健在なころは、消費文化の浸透によって子どもの世界が資本の論理に支配される、といったイデオロギー優位の短絡した論議がなされた。より素朴に、マンガを悪書として追放する運動では、性的に過激な表現とともにその背後に大人（悪徳業者？）の儲け主義がある、といった批判がなされてきた。しかし、このような批判は、子どもを尊重しているようにみえるが、実は子どもを判断の主体ではなく、一方的に商品を受容する存在としてしか位置づけていないのでは

ないか。逆説的になるが、子どもの主体性を最も重視するのは子ども産業、といえなくもない。

いずれにせよ、本来、サブカルチャーとしての子ども文化とは、大人が与える文化へのカウンターパワーとして機能すべきものである。その意味で、八〇年代に「団塊ジュニア」が担った消費文化の特性とはどのようなものか。子どもによる独自の市場がない以上、大人が提供する商品の消費という基本型のもとで、なぜ「団塊ジュニア」は自分たちのサブカルチャーをつくることかできた「最後(?)の世代」なのか。

実は私は四九年生まれの「団塊の世代」の一員。四人の子どものなかで、長男は七七年生まれ、「団塊ジュニア」の尻尾として、偏差値の圧力をまともに受けた。その六歳下に次男がいる。私が消費文化が「団塊ジュニア」にとって、一種の大人文化に対するカウンターパワーとなるサブカルチャーになる可能性があることに気づいたのは、この二人の息子の言葉からであった。まず長男の言葉から紹介したい。

(1) いまどきの若者は

(a) 「グループばかりだなー?」

(b) 「今の世の中、一人でやる勇気があるやつなんていないよ!」

(c) 「……………へー……………」

(d) 「ホー、親はグループサウンズ、子どもはロックグループか!」

これは、現在は大学四年に在学中の長男が高校三年(九四年)の夏、BSの音楽情報番組を家族で見ているときに出た会話である。

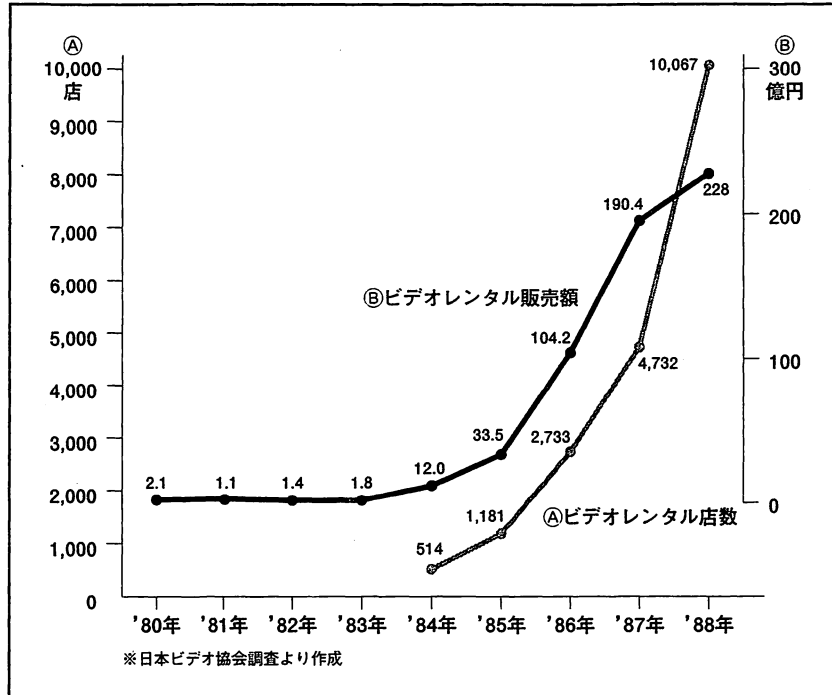
(a) は番組で紹介される日本のベストテンのほとんどがグループで歌うのに気づいた私のつぶやき。それに間髪いれず応じた長男の言葉が(b)である。その語気の強さと論理?の明快さに驚いて(わが子の成長に感動する母親の思いを込めて——と私は思ったが)発した妻の言葉が(c)である。長男に何となく先を越された気分も重なって、訳知り顔で解説を試みようとした私の屈折した気分がまざった言葉が(d)である。

対話はこれで終わったが、その数日後の朝、長男の言葉が私の中に残っていたためか、朝日新聞「天声人語」の次の書き出しに目が止まった。

「いまの二十歳前後の若者たちの行動を形容するのに『囲い込み』という言葉が使われているのに出くわした。『自分のまわりに囲いをつくる。仲間にしても、本当に気の合った者だけをボックスのように囲い込む』という(九四年六月二四日)博報堂生活総合研究所による「団塊ジュニア」(九四年時点で十九歳から二十二歳)の意識と行動に関する調査結果を用いての現代若者論であった。

「天声人語」では、さらに『囲い込み』に加えて、次の五つがこの世代の特徴と

【図5】
ビデオレンタル店数とビデオレンタル販売額



※【別冊宝島—80年代の正体!】(小浜逸郎「AVギャル▼すべてのセックスが商品になったとき、もっともリアルで安直な [性]、AVが生まれた」)より。

して紹介されている。

『自然体』(無理しない、がまんしない、対立しない、気にしない)、『よいこ』(かっつてのなまいきな若者とはちがう)、『低温』(さめていて現実的)、『無性化』(男女の区分を気にせず)、『摩擦回避世代』(常識、自分の心、人との関係について無意識に摩擦を避けようとする)。

このように紹介された団塊ジュニアの特徴と先の長男の言葉から、私は次の三つのデータを思い出した。

「ビデオレンタル店数とビデオレンタル販売額」(図5)

「コミックマーケット参加者数の推移」(図6)

「高等学校と大学・短大進学率の変化」(図2)

まず図5に示した「ビデオレンタル店数とビデオレンタル販売額」と図6の「コミックマーケット参加者数の推移」をみていただきたい。ともに八〇年代中頃から急激に右上がり。他方、第一節で紹介した「高等学校と大学・短大進学率の変化」(図2)は、七〇年代半ばにピークになったあとの八〇年代は横ばい。

この三つのデータを重ねると、「進学率」が横ばい状態になった頃に「ビデオ」

「コミックマーケット」が急激に上昇したことになる。この関係は偶然なのか。実は、私がこの三つのグラフに興味をもったのは九〇年の最も大きな話題となった幼女連続殺人事件によって流行語になった「おたく」現象の調査をしていたとき

であった。

(2)「困い込み」の背景

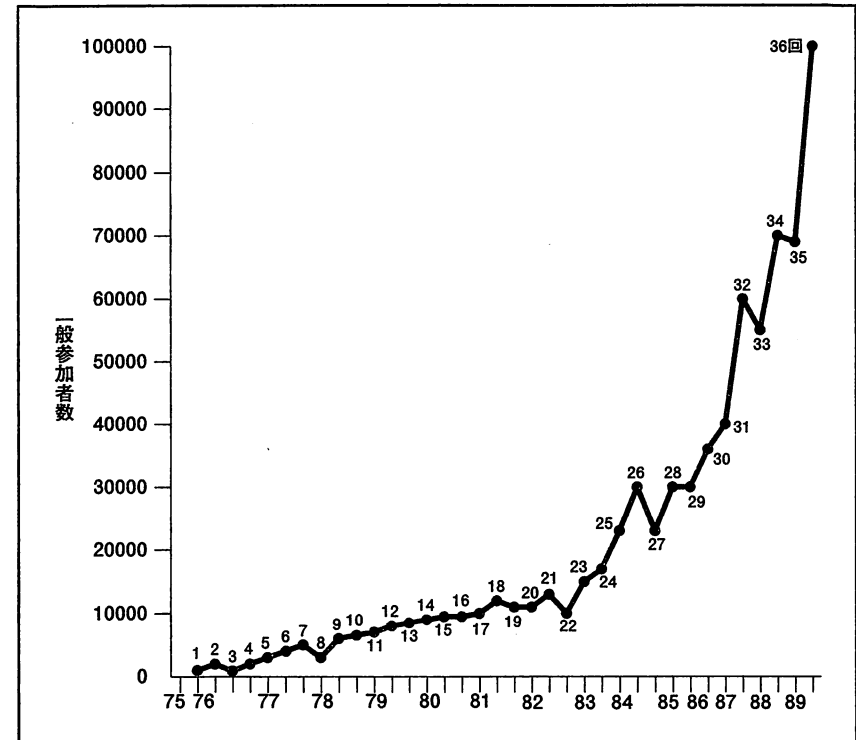
「個室文化↓勉強部屋?」、これが図5、図6のグラフをみて直観的に感じたこと。さらにそれは図2のグラフと重ねることによって確信に変わった。

まず、レンタルビデオ店の拡大の理由だが、これは男性であればすぐ想像できよう。アダルトビデオ(略してAV)が若者に支持されたことが主要因である。いうまでもなく、AVは非常にパーソナルな文化。誰にも邪魔されずに一人で見ることでその本来の機能を発揮するメディアである。

したがって、レンタル店でAVを多くの若者が借りるようになるには、他者から閉ざされた空間とビデオテレビの個人化が進んでいなければならない。これまで茶の間の文化の中心にあったテレビが、AV(これはオーディオ・ビジュアルの略)機器となつて、ヤングアダルトのパーソナルな世界の演出ツールに進化したわけである。

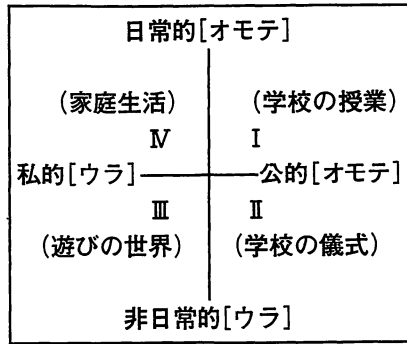
「コミックマーケット」(略してコミケ)の場合も同様の条件が必要。この時期(八〇年代)のコミケとは、年一回、東京の晴海国際貿易センターに全国のマンガマニアが自分の作品(同人誌)を持ち寄る世界であった。AVレンタルが男性中心であるのに対して、コミケは女性が多く、「やおい族」に象徴されるように、女性

【図6】
コミックマーケット参加者数の推移



※「別冊宝島—おたくの本!」(米沢嘉博「コミケット 世界最大のマンガの祭典」より)。

【図7-A】



(3) 学校は「オモテ」か「ウラ」か

その意味で、この学校中心に自己形成をした第一世代である「少産世代」の社会観、あるいは天声人語に紹介された「団塊ジュニア」の特性は、学校という大人が準備したオモテの文化の影響なのか。それとも、レンタルビデオ店に代表される学校とは異なる文化、いかえればサブカルチャーという名のウラ文化の影響なのか。

以下、学校に代表される子どもたちのために大人が用意した正当な文化を「オモテ文化」、大人の支持とは関係なく、子どもが選び取った（つくった）文化を「ウラ文化」と表現する。

この図は社会生活を「公—私」、「日常—非日常」という二つの軸で分類したものである。子どもの場合、「I」は「学校の授業」、「IV」は「家庭生活」、「II」は「学校の儀式」、「III」は「遊びの世界」となる。もちろん、「I」が遊びの子どもいれば、成長の度合いによっても異なる。また、「遊び」が「III」であるためには、親や教師の目から離れた子どもたち自身の世界であることが前提条件となる。

が描く性的に過激な作品も少なくない。それ故にというわけではないが、どのような種類であれ、一冊にまとまるマンガを書き上げるには、一定の時間と空間が必要である。レンタルビデオ店と同様に、コミケもパーソナルな作業と閉ざされた空間がなければ成立しない世界である。

なぜこのパーソナルな時空が可能になったか。私の結論は「勉強部屋の普及」、その根拠が図2のグラフである。八〇年代以後、前節で紹介したように、高校は九割以上、大学は四割前後の進学率になり、専修・専門学校等を含めれば、七割近い人たちが高校卒業後も進学する時代になった。この進学率の上昇は、勉強部屋という名の個室が全国に普及する過程でもあつたはず。

さらに、このことは日本に生まれた子どもも多くが二〇歳過ぎまで学校という世界の中で生きる（なければならぬ）ことであり、一人の社会人として自立するための基盤となる、思春期から青年期にかけてのアイデンティティ形成が学校を核に行われることを意味する。他方、アイデンティティ形成とは、自己と自己を取り巻く社会の認識すなわち社会観とが一体になった自己認識（同一性）を形成することである。

したがって、八〇年代に図5、6のグラフを右に押し上げた若者とは、社会観形成の場が学校中心になった最初の世代、すなわち「少産世代」である。そして、グラフ上昇後の八〇年代末に思春期を迎えたのが「団塊ジュニア」ということになる。

この分類を「オモテ文化」と「ウラ文化」という観点から見ると、原理的には四つの世界それぞれ「オモテーウラ関係」があるはず。だが相互の関係では、「公」に対して「私」が、「日常」に対して「非日常」が「ウラ」に位置づけられよう。それゆえ、「公的世界の文化」に対しては「私的世界の文化」の方が、また「私的世界」でも「日常的」よりは「非日常的」の方が「ウラ文化」度？が高いと考える。ところで、学校は「Ⅰ」と「Ⅱ」の世界が中心である。「Ⅲ」と「Ⅳ」は学校の外の世界の問題となる。子どもの世界が学校中心になるとは、「Ⅰ」と「Ⅱ」が増えて「Ⅲ」と「Ⅳ」が減少することを意味する。

このことをオモテとウラの関係からみれば、学校という「オモテ文化」が「家庭生活」や「遊びの世界」の「ウラ文化」に進出（侵略？）していくことと位置づけられよう。

また、アダルトビデオや「やおい族」に代表されるコミック同人誌をオモテ文化とみる人はいないであろう。逆に高校や大学への進学はオモテ文化の代表であろう。とすれば、先のグラフの「進学率」がピーク・横ばい期に「AV店」と「コミケ」が急上昇とは、子どもの社会生活が「学校のオモテ文化」に覆われた時に「ウラ文化」が興隆し始めたということになりはしないか。

(4) 勉強部屋のパラドックス

思春期におけるアイデンティティ形成の課題を一言でいえば、男の子が男に、女の子が女として成長するための課題といえよう。アダルトな世界への関心である。だが、学校のオモテ文化には、健全で平等な男女の文化はあるが、アダルトな性の文化はない。

学校が教えられるのは、性交、射精、受精、受胎などの性に関する科学的知識と性的関係が無機質化した男女の愛情。生物としての性差（セックス）と社会的性差（ジェンダー）の隘路をかき分けて、男の子が男になり女の子が女になるノウハウ、たとえば恋人を獲得するための話術や化粧術やセックスの方法を教えることはできない。

これらは「家庭生活」や「遊びの世界」において、しかも「オモテ」ではなく「ウラ」の文化として蓄積されてきたものである。だが、八〇年代以後、家庭や遊びの世界に学校「オモテ文化」は侵略し続けたはず。祭り、ゲーセン、スーパーには健全育成の目が光り、自販機から一般書店まで、アダルトなウラの文化を追放した。そして各家庭に勉強部屋という「オモテ」の文化の植民地を築いた。

だが、子ども達の方も負けてはいない。学校が期待するほど健全でも純粹でもなく、健康な男と女である。すなわち、思春期のあがきの過程で子どもではなく大人

の男と女の世界を生きようとする者が見出したのが、勉強部屋を自由な遊び空間に読みかえること。その中にいるかぎり、自己とその世界を自由に表現するアクターに変身できることに気づいたからである。

勉強部屋は学校文化すなわち「オモテ文化」が家庭生活に浸透した結果生まれた世界。それがアダルトビデオや過激なコミック描写という新たな「ウラ文化」興隆の場を保証したわけである。「オモテ文化」の侵略が「現代ウラ文化再生産保護区」を生み出すパラドックス、これがニグラフの隠れた因果連関である。

そしてこれが大人から与えられた文化を自分たちのサブカルチャーとして再構成する過程であることも理解されよう。しかし、与えられたものの組み替え（読み替え）だけでは限界があることも否定できない。

(5) 閉ざされたウラから世界へ

いかに解放区とまでとってみても、部屋の外は学校の「オモテ文化」が輝く場であることに変わりはない。部屋の中も本来学校文化の植民地である。その意味で、そこで生まれた「ウラ文化」も学校文化の光から逃れられない。

改めて天声人語が紹介する若者の特性を見直してほしい。『自然体』『よいこ』『無性化』『低温』『摩擦回避世代』、いずれも学校の秀才に要求されるパーソナリティではないか。さらに、「コミケ」の作品のモデルは圧倒的に少年ジャンプのキャラクターだが、そのジャンプのコンセプトである「友情・努力・勝利」もまた学校教育の理念である。「ウラ」と「オモテ」はまさに表裏一体となる。

その意味で、内側に「囲い込み」を求める「団塊ジュニア」の特徴は、外の変化より内側の秩序を優先する学校文化の完成品とみなすこともできる。

ただし、学校がどうであれ時代とともに生きるのが子どもたちである。彼ら彼女らは、もう一つのパラドックスの世界に生きている。それは内側への囲い込みが、かえって世界と結びつくパラドックスである。マルチメディアのバーチャルリアリティと一体化し、十数インチのディスプレイに世界各地をリアルタイムで結ぶ力もまた「団塊ジュニア」の個性といえよう。

親の「団塊の世代」は外の世界に自己を表出することでアイデンティティを獲得した。そのジュニアは内に向かって自己を同一化する世界を描きだす。長男の「一人でやる勇気がない」とは団塊ジュニアの一人としての自己省察のはず。一見リアルでアクティブと思えた親の「団塊の世代」は、保守の繁栄の中に散逸し、「金ピカ」の虚飾の中で自己を形成したジュニアの内に向かうエネルギーは、メディアを介して世界にネットする。

しかし、この内側に向かうエネルギーを、新たな時代と社会の創造に転換できるかどうか。少なくとも、「団塊ジュニア」が成人し、社会の第一線へと散っていく九〇年代後半においては、日本経済の停滞もあって、必ずしも明確な答えを出せて

いるようには思えない。もつとも、成人したとはいえ「団塊ジュニア」はまだ二〇代。社会的評価を問うためには、もう少し時間がかかるかもしれない。

少なくとも、大人が用意するオモテ文化に抗するカウンターカルチャーとしてのサブカルチャーを、大人に与えられたものの再構築としてはあるが、それなりにつくることができたことは認めたい。ただし、繰り返しすが、それはあくまで自己のテリトリーを確保するという消極的なもの。ディスプレイの彼方はワールドワイドであつても、それを手に取ることはできない。生身の人間は身近な気の合う少数の仲間閉塞する状況が続くとすれば、「団塊ジュニア」の未来は厳しいものとなるう。とりわけ、図4で示したように、八〇年代の繁栄を支えた世界と国内双方の条件が崩壊し、前節で指摘した少子化がもたらす日本社会の構造変動は、親の「団塊の世代」のリストラだけではなく、「団塊ジュニア」にも及ぶはず。「金ピカ」に支えられた内側指向のサブカルチャーのみでは、メガコンペティションといわれる世界大競争の時代を生き抜くことはできないのではないか。

しかし、たとえ「金ピカ」の下駄をはいた内向き指向のサブカルチャーであつたとしても、「団塊ジュニア」は自前の文化をつくることはできた。量の多さはパワーであり、世界を共有する仲間を見いだすことが可能だからである。また、経済の繁栄は、多様な文化の併存を許容する余裕を生む。「金ピカ」と揶揄されようとも、バブルはバブルなりにパワーの源であつた。

しかし、この二つの条件をともしつた「団塊ジュニア」の後輩たちは、自分たちの文化をつくるができていないのだろうか。そのことを考える糸口として、私の次男の言葉をとりあげたい。

新たな文化は生まれているか

(一) 実感と規範

九七年から九八年にかけてたてつづけにおこつた中学生による誰もが予期しなかつた事件を契機に、現代の子どもたちの規範意識の欠如を前提とした「心の教育」の必要性が強調されるようになった。しかし、私はそこに違和感を感じざるをえなかつた。もちろん、犯罪を肯定するものではない。だが、今を生きる子どもたちの行動様式や心の実態を詳細に把握することなく、大人の既存の価値基準に基づき裁断するかの如き論議を肯定できなかつた。その前提にあつたのが、第一節の「子ども文化への視点」に記した、「文化は人が生きようとする場がある限り必ず生み出されるもの」であり、「その開示を試みる知的謙虚さから子ども文化研究は始まる」との私見である。

そしてこのことを気づかせてくれたのが、次の次男の言葉である。

「くそ、暑いな、なんでこんな学生服、着なきゃなんないんだ……でもいっても仕方がないか……」

次男が中学一年（九六年）のときである。ある雑誌編集部から現代の子どもたちの価値意識をテーマに、特に「正直」という価値についてまとめることを依頼された。それこそ正直いって、どこから切り込んでよいのか検討がつかず悩んでいた。そのときに、切り口を見いだしたのが、上記の次男のつぶやきであった。より正確にはそれを聞いたときの私のとまどいであった。5月末の蒸し暑い日の朝、遅刻寸前で、いそいで学生服を着る次男がふてくされながらつぶやいた言葉である。

私は制服を必ずしも否定する立場にたつわけではない。だが、私の中学生時代と同じ黒い学生服である必然性はないとも考える。制服の効用としてあげられる経済上の観点からも、他に転用がきかない学生服は余分な出費になりがちである。自由にすれば服装が乱れ、服装の乱れが態度の乱れという三段論法を強調する意見もあるが、学生服こそ逸脱行動のシンボルに用いられることが多いはず。まして、季節の変化に抗して、形式的に冬服用の学生服を強制することにどれほど意味があるのか疑問、といわざるをえない。

そのため、私は次男の不満を当然のことと思いつながら聞いた。ではなぜとまどったか。「いつても仕方がない」と自己規制してしまったからである。実は先に紹介した長男も、中一の同時期に同じ不満をもらした。その時は、母親に向かって、答えられないのを承知で、制服を着なければならぬ理由の説明を反抗期特有の態度で迫った。私はそのやりとりにも、自分の実感と相いれないルールに抗いながら、一

人の人間（社会的）として自立するためのアイデンティティを求めてあがく、長男の成長を確認した。

その六年後に同じ疑問をもったのが次男。中学になって着る学生服と梅雨時との mismatches に思春期特有の心のゆれと、いずれも条件は同じ。再び荒れるものと思つた。だが、長男は自分の実感を「正直」に言葉と行動に顕したが、次男はそれを抑制した。

このような「正直であること」に対する態度は、次男特有のものなのか。

（2）徳目と社会的文脈

徳目としてあげられる価値項目の意味は、特定の社会的文脈の中で初めて明確になる。したがって、現代の子どもにとっての正直という徳目をもつ意味を明らかにするためには、子どもたちの思考や行動様式と関連づけながら、この徳目をどのような社会的文脈（場面）の中で用いることが可能（不可能）かを問うことが必要である。

このような観点から、次男のつぶやきを次のように解釈した。

もし、「仕方がない」という言葉の背後に、たとえ不愉快でも我慢して学生服を着ることが、中学校の期待する中学生らしさ（社会的文脈）であるとの判断があったとすれば、次男にとって中学生らしさは、「自分の実感に正直」であることを抑

制することから始まったわけである。さらに、この「自分に正直」であることを抑制する学校という場（社会的文脈）の特性は、制服あるいはその前提にある校則や生徒指導のみでなく、現代の学校的世界自体に内在する傾向ではないか。

もちろん、一人の人間として自立するためには、社会規範の学習（社会化）が必要であり、個人的実感をコントロールすること自体を避けることはできない。その意味で、大人への道を模索し始める時期に当たる中学時代に、個人的実感とは異なる規範を受容せざるを得ない場面が生ずるのは当然である。

だが、いかなる実感をどのように抑制または許容するかは、社会的歴史的に相対的なはず。加えて、抑制と許容いずれにせよ、それを正当化する倫理（価値）と論理（合理性）とともに内在化しなければ、単なる強制にすぎない。そして、通常、「正直」という徳目は、個々人の内的な感情や思考を、抑制ではなく、外的に顕現することを社会的に許容もしくは促進（「正直に告白しなさい」）する際に、意味の内実が明確になると考える。

したがって、次男の「仕方がない」という不本意な感情（倫理と論理が伴わない）を意味するつぶやきの背後には、個人的実感より集団である学校のルール優先という社会規範の内面化に止まらない問題があると考える。それは、最も倫理と論理を重視すべき場であるはずの学校という社会（的文脈）における規範の内面化の過程において、正直（倫理と論理とセットになった）という徳目が第一義的な価値をも

たない、という問題である。

（3）学校における正直の抑制過程

校則との関連で学校を問題視する意見は多い。校則をなくせば、子どもの自由が蘇るかの如き論調もある。だが私は、学校が旧来の「教師が教科書を教室で時間割にしたがって教える」という構造を維持するかぎり、正直という徳目が第一義的な価値になりえない心理的規制の拡大再生産が、今後も続くと考え。教科書に代表される事前に定められた知識の教授ならびに知識の記憶量の過多と操作時間の短さを基準とする評価が続く限り、あるいは正直と成績の正の相関が証明されない限り、学年の進行とともに正直であるかどうかは二次的な要因になるからである。

たとえば、小↓中↓高と授業を比較してほしい。先生の質問に子どもたちが自分の考えを正直に答えるのは、小学校の中学年までであることに気付くはず。逆にも、教師が自分の考えを正直に答えなさいと質問し、子ども一人一人が異なる考えを正直に発表したなら、その全てを教師は認めうるか。たまたま教師の期待する言葉を子どもが発する場合は別として、結局は教師の用意する答えに子どもが合わせることを望むしかないはず。

道徳や特別活動、特に生徒指導において、正直という徳目を強調することはあっても、成績評価の過程で正直であることにどれほど重きをおいているか。次男の

「仕方がない」が示唆するように、子どもの成長とは、この事実を学習し、教師と学校の考えに自分を合わせるようになる過程といえまいか。これが学校的世界における社会的文脈の中では、正直という徳目が第一義的な価値をもちえないとした理由である。

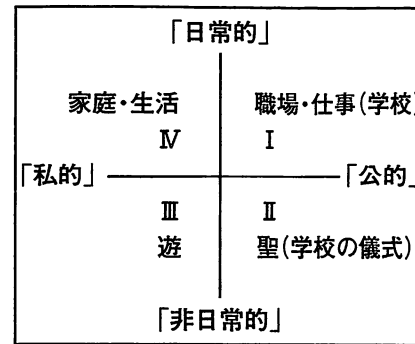
とすれば、現代の子どもたちにとって正直は意味をもたない徳目なのか。

(4) 社会生活の四つの場

これまでの論点を整理するために、前項で用いた図7をアレンジしてみた。二つの軸は同じだが、より普遍的にⅡを「聖」、Ⅲを「遊」と表現した。日常性(「Ⅰ」と「Ⅳ」)を反省し、正しさの基準を提示するのが「Ⅱ」、日常性から離れ、ストレスを解消し、活力や創造性の源になるのが「Ⅲ」の機能と位置づけたい。

次男を含め、子どもたちの公的な日常は、圧倒的に学校的世界、すなわち正直さとは別次元の価値に基づく評価が優先する場である。ここでは、自分に正直であることを抑制することを「らしさ」の基準とする規範の受容が強制される。

【図-7B】



私的な日常はどうか。次男の不満と自己規制が、学校ではなく家庭で表現されたことが示唆するように、子どもの成長は、家庭に学校的世界が侵入する過程といえる。長男のように、学校に起因する不満を吐き出す場が家庭であったことも、家庭が学校的世界を支える場であることを逆の方向から示しているともいえる。これらのことは、公私いずれも日常的な場においては、学校的世界が支配する限り正直という徳目は大きな価値を持ちえない、ということを示唆している。

では、現代の子どもたちにとって正直であることは価値をもたないのか。否である。正直の反対が嘘であるとすれば、人は嘘をつき続けるほど強くなるはず。日常において正直であることを抑制された自己は、非日常的世界において表出する。

(5) 三つのマンガの世界に

この時期の次男の愛読書(?)はその年の六月に第一部連載が終了した『少年ジャンプ』(集英社)の『SLAMDUNK』(いのうえ たけひこ)とジャンプに代わって『少年マガジン』(講談社)が再び王座にすわる原動力となった『シユート』(大島司)と『はじめの一步』(荒川ジョージ)。いずれも、自分の選んだ道をひたむきに(喜怒哀楽の感情をストレートに出すことも含めて)生きる高校生の姿を描いたマンガ。ただし、『SLAMDUNK』はバスケット、『シユート』はサッカー、『はじめの一步』はボクシングである。

この三つはそれぞれ舞台は異なるが、ストーリーを比較する限り、かなり共通の価値観のもとに展開される。確かに、キャラクターは極めて多様である。だがそのこと自体が、多様性という価値観の共有と仲間の世界が舞台という共通フレームの存在を示唆している。また、自分が選んだスポーツのルールにおいては、非常にストイックな世界を受け入れるが、それ以外の世界のルールには自由が原則、個々のキャラクターの個性を発揮する場として描かれることも共通。そして、何よりも共通なのは、スポーツを選択する基準である。

(a) 「頑張って 桜木君 このリハビリをやり遂げたら 待っているから

大好きな バasket が 待っているから」(『SLAMDUNK』)

(b) 「仕返しとか そんな小さな理由で始めたんじゃないんだ。ボクはボクシングが好きだからプロボクサーになりたいんです。」(『はじめの一步』)

(c) 「トシーサッカー 好きか?」 「はい」(『シュート』)

(a) は第一部最終回の最後の頁、背骨負傷でリハビリ中の桜木花道への心の恋人赤城春子による手紙の言葉。(b) はボクシングを始めた理由を幕之内一歩が、それまで彼をいじめてきた同級生に言い放つ言葉。(c) は田仲俊彦が最も憧れ尊敬する先輩久保嘉晴の死を前にして、サッカーとの関係をふりかえるシーンに描かれた言葉。私はこの場面を、子どもの心を表現する最も優れた表現の一つと評価するが、(a) (b) とともに、主人公がバスケ、サッカー、ボクシングをするように

なった理由が明らかになるシーン。種目は異なれど、選んだ理由は共通であることが理解できよう。

国、学校、チーム、監督、正義、平和……いずれのためでもない。バスケ、サッカー、ボクシングが「好き」だから、これが答えである。すなわち、好きという「自分の実感」に「正直に生きる」ためである。

このことについて、普遍的な理念や価値ではなく、個別的な感情にしか、自己の行為の正当性の根拠を求めえないのが、現代の子どもたちの世界の特性、と解釈することも可能である。だが、少なくともこの場合の実感とは、単なる一時の感情の問題ではない。それですむほど、サッカーもバスケもボクシングも甘い世界ではない。

この点と関連して、もう一つの共通点を指摘したい。それは非常に高度な技術の極めてリアルな描写と精密な説明をストーリーの骨格においた、リアリティ溢れる構成であること。そこには、かつての『巨人の星』の大リーグボールに代表される世界はない。世界のトッププレイヤーが練習と研究を重ねて生み出した技術が次々と紹介され、それを実践するキャラクターは、その場ではスーパーヒーローになる。だが、バスケ、サッカー、ボクシングを離れば、授業をさぼり、女の子に憧れ、失恋をする、どこにでもいるドジな男の子。自分たちの仲間の物語であることが、もう一つの共通点である。

(6)「遊」と「聖」からの逆照射

技術的にも倫理的にも完全無欠なスーパーヒーローとは、この世の人間ではなく聖なる世界の住人。それは自分たちの日常の外にある。そして高度の技術もまた子ども達の日常の延長にはない。このような非日常性と描写・ストーリーのリアリティ(日常性)との矛盾を解決するために、『SLAMDUNK』と『はじめの一步』が用いた手法が、実在するが神(聖)に近い世界のトッププレイヤーの技術の精緻な模倣である。さらに、『シユート』の場合は、死を介した久保嘉晴の「聖なる世界」への飛翔である。このように、現代の子どもたちが、マンガの世界とはいえ、日常性を越える世界に自己の実感の正当性を求めていることは重要である。

すなわち、まず何よりも学校的世界から離れた私的な実感(好き、嫌い)にこだわるのが第一義。その意味で、図17Bの「日常(I・IV)」ではなく「遊(III)」が基盤である。だがそれは、うつろいやすい感情に委ねた不安定な判断と行動ではない。自分の命を縮め(久保)、背骨を負傷(桜木)し、顔が歪む(一步)ことも覚悟して、「自分に対し正直に生きる」こと(「聖(II)」への志向性)を優先することから生まれる選択である。

そして、いずれのキャラクターもストイックな面はもつものの、特別な人間ではなく、ドジな仲間。舞台は高校でも、読者の次男には中学生としての日常の延長線

上で捉えうる存在。その意味で、マンガという非日常的な「遊」びの世界が、私的な日常の人間としてのあり方のモデルになり、公的な日常の学校の規範を相対化する。

「公」と「私」いずれの「日常」でも表現できない「自分への正直さ」を求めた「非日常的」な「遊」びの世界が、「聖」なる世界を介して(倫理と論理を伴って)、「正直」の価値を優先する、もう一つの「日常的な世界」を形成する「機縁」になる。このような現象(逆転)が生じていないか。

少なくとも、個々のキャラクターの差異性よりも、集団への共通帰属を優先する学校的秩序に抗して、自己の個別的で具体的な内的実感に「正直」であることを、第一義的価値とする個性が、倫理性と論理性(普遍性)を伴って、子どもたちの中に確実に育まれていることを、毎週一千万以上の読者を魅了するこの三つの作品は示唆していると考ええる。

もちろん、このことを実証的に調査して確認したわけではない。しかし、少なくとも、大人が提供する商品の消費という形態は変えることができなくとも、子どもたちが選択した商品には、一種の共通感覚(コモンセンス)の世界が育まれていると考える。特に、毎週、葉書アンケートによる読者の評価をもとに編集するマンガ雑誌は、その制作・編集システムの必然として、読者のニーズから離れられない。したがって、カウンターパワーを内在化したサブカルチャーにまで体系化されるかど

うかは別として、九〇年代を生きる子どもたちの中にも固有の文化が育まれていることは理解できよう。

ただし、それは、第一節の末尾部分で指摘したように、現在の子ども文化に問題がないということでもなければ、今育ちつつある人たちが克服すべき課題がない、ということでもない。そこで、次に中・高校生への実証調査の結果を探ることから、現在の消費文化とともに生きる子どもとその文化の課題について考察したい。

4

消費社会に育つ子どもとその文化の課題

私は九八年から九九年にかけて、静岡県教育委員会の依頼により、静岡県内の中・高校生を対象とする「青少年の生活に関する意識調査[※]」の実施と分析に携わった。調査のテーマは最近増加が危惧される薬物利用の問題だが、その前提として、中・高校生の家庭や学校での人間関係や生活状況、あるいは問題行動について明らかにすることを試みた。その中から本節の課題に即して紹介したい。

ところで、調査対象である現在の中・高校生とは、「団塊ジュニア」と「少子世代」の間の世代。他方、学校は今、新学力観の展開や総合的学習の実施を代表に、

多数者への共通知識の教授と選別（序列づけ）のための制度から、少数者の個性や創造性を育成する制度へと転換する過程の真っ最中。当然、摩擦も生じる。学級崩壊や学力低下がマスコミの俎上にのぼる理由である。第二節で略述したが、かつて「少産世代」から「団塊ジュニア」への移行期の中学校に校内暴力（八〇年）が起こった。それと同一とはいわないが、制度変革の影響を最も受ける可能性が高いのが、現在の中・高校生の世代ではないか。

さらには、学校の外では、一方で「団塊ジュニア」以上に高度に進行した消費社会に生まれ育ち、消費文化を自己形成の中核においた者である。他方で、モノの豊かさに反比例するかのよう減少する出生数や出生率の低下の影響、すなわち仲間関係の希薄化の影響を免れない世代であろう。さらに、実はこの調査対象者の仲間の一人が、先に紹介した次男だが、マンガの世界から読み取った彼ら彼女らの文化は、まさに絵空事の世界に止まるのか、それとも現実の生活世界のなかに機能しているのか。これらのことに配慮しつつ、消費社会に育つ子どもたちとその文化の課題を考察したい。

縮小する家庭

第二節で「団塊ジュニア」は「団塊の世代」により、また「少子世代」は「少産世代」により、幼児期から消費文化のなかで育てられていることを指摘した。消費

社会に育つ子どもたちの課題はまず家庭から問い直されなければならない。

このような観点から、父母との関係を質問したところ、その結果を要約すれば、母親の過剰と父親の希薄化、ということである。たとえば、「母親とよく話す」が八一・二%、「母親は自分のことをよく分かっている」が四七・八%であるのに対して、「父親とよく話す」は五一・八%、「父親は自分のことは分かっている」は二八・六%である。

家庭は、いうまでもなく子どもが社会性の基盤を形成するうえで最も重要な場となる世界である。特に、専業主婦とサラリーマンの夫に二人の子どもという、現在、最も高い比率を占める平均的な家族にとって、家庭の外の世界に生きる父親でしか担うことができない社会規範の学習（社会化）項目は多々あるはず。だが、その父親の存在の希薄化は、多くの家庭で社会性の社会化のエージェントになる可能性をもった「意味ある他者」を、母親以外に見出だせない（社会性の社会化が未完成？になる可能性が生じる）状況が一般化していることを示していないか。特に男子にとつて、本来なら思春期における男性モデルともなるべき父親の存在の希薄化は、単に社会規範の社会化のみでなく、一人の男性として自立するための最も身近なモデルをも失いつつあることを示しているのであろうか。

あえていうまでもなく、これは旧来の男らしさや父親らしさを復権せよという意味ではない。家庭の教育力低下への危惧の声が高いが、その解決策を一般的に提示

する限り、実質的に家事・育児を担う母親への叱咤激励にならざるをえない。だが調査結果は、母親の教育力の低下ではなく過剰、すなわち性別役割分業により子育てを母親にのみ任せてきた「つけ」と解釈すべきではないか。父親が希薄な現状のまま、家庭教育の強化⇨母親教育の強化を求める限り、問題解決への道はかえって閉ざされることを指摘しておきたい。

他方、現在、子育て真っ最中の「少産世代」の母親が孤立する状況とその問題点については、第二節で指摘した。それは今後続く「少子世代」においてもまた父親の希薄化が進行する可能性が高いことを示唆している。その意味で、母親ではなく父親の育児・教育環境の改善こそ、「少子世代」の子ども文化の課題を解明する上でまず最初に強調すべきことと考える。さらに、父母いずれにせよ、既に消費文化を内在化した子育て未経験者であり、現実に母親のみの孤立した子育てという事実がある以上、紙おむつ、市販のレトルト離乳食、ファッショナブルな子育て雑誌など、商品とメディア情報による育児、すなわち育児の消費文化化は避けえない。そのことを前提にした上で（それだからこそ）、育児商品やメディアによる情報と若い親の間を割って入る、直接的な人間関係による育児支援ネットワークの再構築が、今最も求められる課題と考える。そしてこのことが、消費文化としての子ども文化に内在する課題を解決する基盤となろう。理由は、次に指摘するが、消費文化に溢れた社会で生活する現在の中・高校生が最も求めるのが、商品ではなく友だちだけ

らである。商品やメディアによる情報を介さない人と人のコミュニケーションを豊かにするための基盤を、幼児期（親子双方）から再構築する必要があると考える。

友人への欲求の大きさとその関係の不安定さ

そこで友だちとの関係だが、その第一の特徴は、悩みごとの相談相手として、家族や学校関係者と比べて友人を選ぶ比率が圧倒的に高いことである。家庭、学校、それ以外という三つの場における相談相手を質問したところ、家庭では母親が最も高く四八・七％、次いで兄弟姉妹一九・九％、父親一五・五％の順である。「家族のなかにいない」も三六・三％とかなり高い。学校関係者ではより明確に七〇・五％が「学校の中ではない」。ようやく担任の先生が一四・三％、あとは部活の先生（四・三％）、その他の先生（四・〇％）、保健（養護）の先生（三・〇％）、カウンセリングの先生（一・二％）と非常に少数、生活指導の先生はわずか〇・八％である。

それに対して、家族・学校以外としてあげた友人は八五・七％である。もつとも、相談相手に友だちを選ぶ比率の高さは、既に様々な調査で確認されているが、次に示す二つの特徴を重ねることにより、現在の中・高校生固有の問題はより明確になるであろう。

その一つは、友人関係について二三項目にわたり質問した結果である。「よく、

ときどき）ある」と答えた者の順に並べると次のようになる。

- ① 「休日に一緒に遊ぶ」(八三・六％)
- ② 「家に遊びに行く」(七三・六％)
- ③ 「異性のことを話す」(七〇・二％)
- ④ 「悔しい気持ちを訴える」(六二・五％)
- ⑤ 「家に遊びに来る」(五二・五％)
- ⑥ 「不満を話す」(四六・七％)
- ⑦ 「将来のことを話す」(四一・八％)
- ⑧ 「友だちの家に泊まる」(四二・一％)
- ⑨ 「お金や大切なものを借りる」(三三・五％)
- ⑩ 「お金や大切なものを貸す」(三一・一％)
- ⑪ 「命令されて友だちにつきあわされる」(一七・四％)
- ⑫ 「友だちと本気でけんかする」(一四・九％)
- ⑬ 「命令して言うことかせる」(一一・四％)

大多数が肯定する①②から、日常的に友だちつきあいがなされていることが分かるが、その具体的な中身は別れる。多数派はこの時期特有の話題の③と相談相手に選ぶ理由となる④のみ。関係の深さを示唆する⑨⑩⑪は少数派である。もつとも、⑨⑩は豊かな社会に育つ者にとっての金や物の貸借の価値の低さを反映していると

いえなくもない。逆に、⑩⑪と、つきあいを強制する(される)経験のある者が一割強いることは気になる。

この調査結果から次のような友だち関係がみえてくる。

友だちと一緒に遊ぶことは多く、互いの家で、好きな人のことや悔しかったことを話題にするけど、それほどマジになるわけでもなく、ましてケンカなどしたくない。だから、時には、あまり気が進まなくてもつきあうこともある。

このように理解するに、中・高校生の友だち関係の特色は、友と友情を深める、というよりも、友とつきあうこと自体に価値がある、と思えてならない。それは古典的な汗と涙の青春ドラマの世界ではなく、人間関係を維持していくための処世術の世界に近いといえまいか。もつとも、このような評価は、先輩、後輩、悪友、親友と有り余る友から離れて一人になりたいと願った「団塊の世代」の発想。家には二人、近所に仲間がいない「少子世代」に近い者には、友を得ること自体が目的になることは当然かもしれない。

そのことを示唆するのが、調査結果が示す友人関係のもう一つの特徴である。それは、中・高校生の親友は非常に限定された範囲での選択ということである。

親友との間柄を質問した結果、ほとんどが同年齢。しかも、中学生では「同じクラス」「同じクラブ・部活動」、高校生では「同じ学校(中学)」「同じクラス」が大多数。中・高校生は学校(クラス、部活、同じ学校だった人)のなかに閉ざされた

人間関係(クラスのマックスは四〇人)しか友人の選択肢をもちえない状況にいることになる。

相談相手として友人への期待は高い。だが、その選択の幅が極めて限定されているとすれば、友人関係の維持自体が最優先されることになって不思議ではない。その結果、互いの違いを積極的に開示することで違和感を増幅し解体への危機を招くよりも、同調するふりをする(それを儀式化した言葉の交換が、その中身を問うことなく「イケてる」という音声記号を相互に発信しあうこと?)で関係を維持することを優先することになりはしないか。このような友人関係のなかで何らかの問題行動が生じたときに、それを止める力はどこから生まれるか。少なくとも、関係維持を優先する同調指向のなかからは生まれにくいのではないだろうか。その行為に対する責任の自覚も含めて。

このような友人関係のもつ問題と課題については改めてふれるとして、先に友人を得る舞台となる学校への評価に目を向けたい。

二つの世界が多元的に併存する学校

ここでは二つ指摘したい。

その一つは、学校がダブルスタンダードの世界になっていることである。

それは学校への「満足」「不満足」を調査した結果に基づくものだが、質問作成

段階では、「学校生活の満足点」と「学校生活の不満足点」について、パラレルに選択肢を用意した(複数回答)。だが、中・高校生の両者への回答は別基準であった。「満足」の理由のトップは「気の合う友達がいる」(八三・一%)、「不満足」の理由のトップは「勉強わかりにくい」(四九・一%)であったからである。因みに、「満足」の理由に「勉強わかりやすい」を上げたのは四・二%、「不満足」の理由に「友達いない」をあげたのは四・二%である。

どうも、現在の中・高校生にとって、学校という世界には、「満足」(友人関係)の基準と「不満足」(勉強)の基準という次元の異なる二つの基準が、一種のダブルスタンダードとして存在しているようである。あえて言えば、勉強ができて友人がいなければ学校は「不満足」ではないが「満足」でもない。あるいは、勉強ができなくても友人がいれば学校は「満足」かつ「不満足」ということになる。

学校は「勉強する場」と「友だちと共にいる場」という二つの世界が、それぞれ異なる評価基準のもとに重なって存在する場になっているといえよう。この二つの世界相互の関連は定かではないが、少なくとも、中・高校生の学校生活へのインセンティブを授業改善のみで高めることは非常に困難な課題になるということを描き出せるをえない。

しかし、このことは、先に長男の言葉をもとに紹介したように、「団塊ジュニア」が学校のオモテ文化の植民地であるはずの家庭の勉強部屋を解放区に読み替えて消

費文化の基地としたのに対して、その後輩たちは、学校のなかを、自分たちの世界に転換しようとしている、と位置づけられるのだろうか。この点についても改めて考察したいが、その前にもう一つ、ダブルスタンダードとかかわって指摘しておきたい。

それは、学校が「悩み」解決の場ではなく「相談相手」としての友を見い出す場として機能しているということである。上述したように、中・高校生の相談相手として、学校関係者なかで最も選択率の高いのが「学級担任」の一四・八%だが、「学校の中にはいない」が七〇・五%と圧倒的な比率を占めている。「学校」という場が担うべきカウンセリング機能の困難さとそのあり方を改めて問いなおす必要性を示唆する数値といえまいか。

しかし、それは「友人」に過度(?)に依存する中・高校生の選択をそのまま尊重することを意味するのではない。むしろ、「相談相手」を「友人」のみに依存することに伴うリスクこそ解決すべき課題と考える。たとえば、「友人」を見いだせない者にとつての学校生活の価値はどうなるのか。逆に「友人」のみに閉塞する者にとつての学校生活の価値もまた問われなければならないであろう。そして何よりも、友人とは成長の度合いが類似した存在であるはず。いわばドングリである。それも相互の同調が優先されるとすれば、ドングリがいくら集まってもドングリでしかない。しかし、思春期の課題は、これまで他者によって形成された自己を一度は否定

して(アイデンティティの危機)、新たにより大きな自己を見いだす(アイデンティティの形成)時期である。その時に必要なのは、同じ位置の者ではなく、アイデンティファイの対象となる自己より上位のモデルである。それがドングリしかいないとすれば、自己形成は志し半ばで止まってしまわないか。

思春期とは疾風怒濤やアイデンティティクライシスという言葉が象徴するように、さまざまな課題を克服することによって自己形成が進行する時期であるはず。そのエネルギーが表層的な同調を優先する友人関係の維持にのみ向かうとすれば、一人の人間として社会的に自立するため必要な要件(対人関係、物事に対処する仕方、生活感覚、職業意識など)の学習(社会化)が成立しなくなる恐れがでてきまいか。

まして、そのエージェントの候補が存在するとされてきた「家庭」や「学校」への評価が低いとなれば、現在の中・高校生の課題を次のように表現せざるをえない。

思春期固有の課題を積極的に乗り越える「場」を見い出せない(喪失した?)世代

ではこのような世代が、いわゆる問題行動に対してどのような意識をもっているか。

規範意識の低下の背後に

本調査では、薬物についての調査の前提として、中・高校生による最近の事件や社会問題への意識を探った。その結果、「神戸児童連続殺傷事件」について「絶対してはいけないと思う」が六三・四%と多数派だが、「気持ちはわかるがしてはいけない」も一四・七%。「栃木県中学生教師殺人事件」では、「絶対してはいけない」が四七・二%に対して、「気持ちはわかるがしてはいけない」が三四・〇%である。さらに「援助交際」では、「絶対してはいけない」が三五・六%、「気持ちはわかるがしてはいけない」は二六・七%であるとともに、「こうしたことが起こるのはやむを得ないと思う」が一三・四%である。因みに、「やむをえない」は児童殺人事件では五・二%、教師殺人事件では九・六%である。これをどう評価するか。

もちろん意識調査であるため、実際に「している」わけではない。しかし、それだからこそ、このような現在の中・高校生の意識に対して、あるいはその前提にある予期せぬ事件や行動をふまえて、「規範意識の低下」という批判がなされることが多い。確かに、従来の日本社会が常識としてきた規範の学習(社会化)が進んでいないことは、各種調査で明らかであり、本調査の結果も、それを確認する数値といえるかもしれない。だが、その原因については、必ずしもコンセンサスがあるとは思えない。その多くは、問題(現状認識の言葉の羅列、ラベルはり)の指摘に止まったままではないか。まして、意識を高める方法については、検討が始まったば

かりといえよう。声だけに「やっつてはいけない」と指導するだけで済む問題ではない。

しかし他方で、本当に今育ちつつある者の規範意識は低下しているのだろうか。低下していると思えるのは旧来の規範であって、第三節で次男の言葉にこだわりつつ紹介したように、彼ら彼女ら独自の規範意識が育っているとはいえないか。少なくとも、本調査の結果は、かなり自分に対して「正直」に考えて出した答えではないだろうか。さらに低下というラベルは、その責任や原因を意識を持つ主体の側に向けがちだが、上述したように、「思春期固有の課題を積極的に乗り越える『場』」を見い出せない（喪失した？）「世代」であるなら、問題の所在は、彼ら彼女らの生きる場に求めなければならない。

一般に、情報過多の社会においては、過剰な情報に身をおいている自覚がある者ほど、情報と距離をとる傾向がある。少なくとも、マスコミを代表とする大量の情報の流れを実証的にたどることにより、情報は直接個々人の意思決定にかわるのではなく、その人が所属する小集団というフィルターを通して入ってくるということが明らかにされている。このことは経験的にも確認できるであろう。

たとえば、ある商品のCMが流れているとする。そのCMに直接刺激されて買う消費者はいないわけではないだろうが、多くは信頼する身近にいる者に「あれどう？」と問い掛け、その同意を得ることによって行動を起こすというわけである。

これを現在の中・高校生に当てはめると問題の所在が明確になる。相談相手に限られた範囲の友人関係のフィルターを通して入ってくるわけである。少数のドンダリ、それも同調を基調とした関係である。このことへの評価については、意見がわかれるであろうが、少なくとも彼女ら彼女らの間で意識される規範が、大人の期待する規範意識の外にあることは理解されよう。また、このような彼女ら彼女らの世界に、一定の判断を示す第三者がどのように介在していくかがキーポイントとなることも同意がえられよう。

ただし、いかに正当な規範であったとしても、上位から強制的に規範を教示したとしても、内在化の成果を期待できない。もしそれが可能なら、学校で一斉に教えることで事足りるはずである。そして、少なくともその役割を学校は懸命に果たしていると考えられる。加えて、規範の正当性自体が社会的に相対化せざるをえないとすれば、今と未来を生きる人たちにとって、過去の基準を一方的に注入することで問題が解決することにはならないのではないか。その意味で、迂回を恐れず、こうした事件を否定しつつも、理解や共感もまた正直に示す中・高校生の心理が顕在化する契機やその背後にある意識の形成過程を丁寧に説明していく必要がある。そのための一助として、彼ら彼女らに最も近い時代と社会を生きる者として、本調査の設計段階から助手としてかかわってきた私の研究室のMさんが、調査結果をもとにこの問題について作成したレポートの一部を紹介したい。中・高校生として今を生きる

者と時空を異にせざるをえない者が、彼ら彼女らの世界と自己の思考や判断との一致とズレを測る手だてとしていただければ幸いである。

*

現在の中学・高校生は変わったといわれる。何がどう変わったのだろうか。我々と同じところ・違うところはどこなのだろうか。

確かに見た目には変化している。ルーズソックス、ミニスカート、PB、携帯、援助交際、*etc.*。そうした新たな文化や意識の変化が目に見える形で表れているのは、主に高校生だと思われる。「PB・携帯電話の所有状況」を見ても、所有率は中学生男子が一一・九%、女子が一二・四%に対し、高校生男子が四六・七%、女子が六四・四%である。

しかし、そのような土壌の形成はそれ以前の、いわゆる思春期になされているのではないだろうか。例えば、中学生においてPB・携帯電話の所有率は、学年が上がるに従って徐々に高くなっている。ここでは、中学時代を思春期と捉えているのだが、思春期は自分を再構築する時期であり、非常に敏感な時期である。この時期に彼ら彼女らはどんな人やものに接し、何を感じ取り、「自分」を創っているのだろうか。そもそも「自分」は創られているのだろうか。「自分探し」がブームであるのも、周りの情報に流されて何となく生きてきてしまったと思われる自分がいるからではないだろうか。そこで大きな影響力を持つのがメディアである。

「現在熱中している事」を質問した結果をみると、一位は友達とのつきあい（四一・八%）だが、以下テレビ番組（三〇・八%）、マンガ・アニメ（三〇・一%）、ファッション（二九・一%）、芸能関係（二七・六%）とメディアに大きく影響されるものが続く。友達とのつきあいにしても、二位以下のテレビ・マンガ・ファッション等の情報を共有していると考えられる。

いうまでもなく、情報社会に生きる我々は、常に莫大な量の情報に刺激されている。中・高校生とて例外ではない。ときには興奮し、ときには麻痺しながら、彼女らは自分に必要だと思われる情報を取捨選択しているように思われる。

自分に必要だと思われる基準は、他（者）との関係の中から読みとらねばならない。しかし、自分自身が形成途上、他（者）との関係も形成途上、実体験の前に既に情報だけが言葉として自分の中に入っている現代の子どもたちにとって、本当に必要な情報を取捨選択し、自分の行動を決定するのは非常に困難なことなのではないだろうか。

情報に弄ばれ、流されるのも無理のないことかもしれない。そうして彼ら彼女らの感覚は麻痺していく。今更「〇〇〇は悪いこと、してはいけないこと」といくらメディアがメッセージを発しても、実感を伴わない言葉は彼ら彼女らには届かない。彼ら彼女らにとって、唯一信頼でき、物事を判断する基準となる存在は、同じ世界を生きる友達である。学校の満足・不満足が友達によって左右されるのも、悩み

事の相談相手に大半の子が友達をあげるのも、様々な面において、友達との関係が基礎となるからではないだろうか。

課題はどっち

私は「団塊の世代」に始まり、「少産世代」から「団塊ジュニア」へ、そして「少子世代」と、戦後の日本社会が消費社会へと進行する過程で生まれ育つた子どもたちのあとを、彼ら彼女らが担い生み出した文化とともに辿ってきた。その際に、可能な限り、その世代の特性を肯定的に位置づけることを試みてきた。だが、「団塊の世代」には「団塊ジュニア」、「少産世代」には「少子世代」と、それぞれが社会人として、さらには人の親として自立したあとの意識や行動と関連させて問題を考察することにより、さまざまな解決すべき課題があることを認めざるをえなかった。その意味で、「団塊ジュニア」と「少子世代」の間の世代として、自己認定（アイデンティティ）の形成途上にある中・高校生に対する課題は重い。過度のメディア情報、濃密な親子・二人っ子関係、家の外の友人関係の急激な縮小、思春期の学校的世界への閉塞等の条件のもとでのアイデンティティクライシスへの処方箋は未だ未完といわざるをえない。そして、その重さは、次に続く「少子世代」に対して、より大きなものとなってこよう。

消費社会になる前の日本社会を知る最後の世代である「団塊の世代」は、消費文

化以前の文化や規範、すなわち、通時的に固定された倫理規範による行動や自己の所属集団への献身、あるいは抽象的な価値（徳目）に基づき、ストックに行動することが正しく善であることを信じてきた。勤勉、勤労、国家、社会、日本、といった理念（観念）と自己の行為を重ね、全体と個、社会と個人との間に連続性の感覚を持ちえた。

だが、消費社会は限りなく旧来の常識（文化、規範）と集団（国家、企業、学校、地域、家庭）から個々人を分離し、その意識や行動の正当性を身近な少数の仲間によつてしか確認できない状況を一般化した。それは、個々人の意識や行動をア prioriに正しく善とする前提が崩壊し、その都度、生まれては消えて（消費されて）いく基準（規範）のもとで判断せざるをえなくなることを意味する。商品と情報を消費することによって自己の存在（自分らしさ）を確認し続けるしかないわけである。それも特別なことではなく、身近な日常生活において、何を着て、何を食べて、どこに行くかを判断する基準自体が、商品となり、消費の対象となる。自分らしさを最も身近に表現（飾る？）する手段である髪形をつくり衣服を選択する美容師やハウスマヌカンにカリスマの冠がかぶせられ、判断を求める若者がメディアにより情報化され、さらに新たな若者の消費の対象となる社会的背景といえよう。もし、このような現象に対して、主体性のなさを批判する学校関係者がいれば問い直してほしい。いったいどれだけ髪形や服装を自分らしく表現することを重視してきたか

を。「しかたがないな」と次男を制服に追い込んだのは誰なのかを。

第一節で述べたように、商品を介在した自己表現は旧来の秩序からの解放の代償として、自己認定の型と安定さを失う。その一つの現れが、最近、論議されることの多い居場所を求める意識ではないか。アイデンティティの形成途上にある者にとって、今の居心地よさを求めれば求めるほど、未来のあるべき自己への不安が高まるはず。今の自己を否定し新たな自己を見いだすことこそ、思春期の課題であり、新たにアイデンティファイする居場所を見いださない限り、アイデンティティは形作れないからである。そしてそれに追い打ちをかけるように、消費社会は商品と情報メディアを通じて、次々と新たな現実を生み出し、それを消費することを求め、一か所に止まることを許さない。その結果、今と未来の居場所の狭間で不安と不満の常態化のみが進行するということにならないか。

そのような社会的心理的過程を生きる限り、選択の基準を、自己の内的な実感、すなわち「好きだから」にこだわる（正直に）しかないのかもしれない。しかし、人は自分の実感と自分のみの判断のみで生きられるほど強くない。自分の実感に正直であればあるほど、他者の認定（同意）を求めざるをえなくなるはず。まして、自己形成の途上にあるものとして、自己を確認できる他者の存在は何事にも代えがたいものになるであろう。自己が他者との相互作用の過程で形成され、他者という鏡によってしか自己を見ることができない以上、他者は他人ではなく自分そのもの

だからである。

一定の外的な価値基準に従うのであれば、他者の同意を求めなくても、自己認定は安定する。価値基準そのものに他者の同意があることが前提だからである。それがたとえ内的なものであっても、明確な概念によって規定されているものであれば、その事自体が他者への言明となつて、同意を得る得ないにかかわらず、一定の安定を獲得できる。まして、神の意思という宗教的背景から生じる規範や理念であれば、それを現実の社会的文脈のなかでいかに遵守するかという次元では迷っても、その基準に基づき判断すること自体を迷うことはない。しかし、明確な基準なしに自分に正直に、好きだから、という判断が安定するには、常に他者の同意が必要になる。まして、次々と新たな提供される商品と生み出される情報に何らかの判断が求められるとすればどうなるか。その選択肢の幅が縮小する一方で、商品と情報の選択肢のみ拡大すればどうなるか。

商品は世代や性差により細分化される。身近な人間関係は非常に縮小する。商品への態度が自己の確認（アイデンティティ）と密接不可分であるとすれば、その商品や情報に対する同感を共に求めざるをえない。同意できる者が友となる。ただし、ここに新たな矛盾が生じる。実感に正直であることを過度に追求すれば、当然、差が生じ、友の同意とズレることになる。友の同意が必要だからこそ、違いが明確にならない程度のつきあいが必要になる。このような心理的規制や判断基準の不在

を日本の大人は批判できないはず。これこそ、「金ピカ」の八〇年代をもたらした、日本の経営を支える間人主義そのものではないか。その末路がバブル崩壊後の改革の機会を先送りし続け、失われた一〇年（九〇年代）をもたらした原因であることも含めて。そしてその型は、意図せざる過程によって、友とその同意を求める新たな世代のなかに受け継がれている。規範意識の低下を嘆く主体とその嘆きの対象者との距離は、それほど離れていないのではないか。

団塊ジュニアは子ども部屋を自分たち（複数が可能）の居場所として、学校文化に対抗する基地とした。その後輩は、学校のダブルスタンダード化により、オモテの学校文化を読み替えることに挑戦（意図的ではなくとも）したといえまいか。その象徴がルーズソックス。制服を変えることではなく制服（オモテ？）に自分たちの文化（ウラ？）を入れ込んだ。外ではなく内側に解放区をつくった（つくろうとした？）といえまいか。

かつて八〇年代は、制服は学校間格差による差別の記号として批判された。だが、少子化の進行に伴う高校の生き残りをかけた制服のブランド化とメディアを通じて情報化された女子高生というブランドの相乗効果により、制服は女子高生の文化（ウラ？）をオモテにして商品としての付加価値を獲得した。だが、ウラのオモテ化は、ウラによるオモテの否定ではなく、オモテの文化構造をそのまま引き継ぐことで成立した。あるいは、本来、ウラとオモテはまさに表裏一体として、その構造

のレベルでは同型であったのかもしれない。勉強部屋を解放区にする意識の型が学校が求めるものと同型であったように。

このことを気づかせてくれたのは、長女の次の言葉であった。

「うちらも大変なんよ、暑くてもはかなきゃなんないんだから」

二年前、長女が高一になった年の夏、ルーズソックスをはきながらため息まじりにもらした言葉である。トーンは違うが次男の制服へのいらだちと同型の意識ではないか。

暑くても規則である以上、学生服を着るのはしかたがない。暑くても、みんなの目がこわいからルーズソックスをはかなきゃなんない。誰に強制されるわけではなく、互いにコンセンサスを第一とする。同意を得ることに苦労するよりも、相手に合わせることを優先する。実感に忠実なようで、実は互いの雰囲気をごわさないことを優先する。友だち関係の維持を優先する。日本の経営を支えてきた間人主義そのものではないか。ただし、その及ぶ範囲が非常に狭く、手順が簡略化されているが。

選択肢があるにもかかわらず、選択をさせなくしたのはだれなのか。消費文化は、本来選択を強制することはあっても、阻止することはないはず（逆機能として生ずることはあるが）。二節で論じたように、子どもたちのオモテ文化である学校文化といわざるをえない。ただし、現代の学校こそ消費文化そのものであることも指摘

ではどうすべきか。もう一度、幼児期からやり直すことも、消費社会以前の世界に戻ることできない以上、今を起点にその新たな可能性を引き出し、育てるために、意識と制度の改編を急ぐしかないであろう。その努力は、まず、自己認定の安定性のゆらぎ、という代償をはらっても、自己の可能性を開く選択肢を準備するツールとして、しかし時に制御不能になる消費文化や情報メディアを積極的にコントロールすることに向けるべきではないか。それぞれの世代の課題に正面から挑むことによつて。

ただし、制度を担い、改編する立場にある者とそうでない者とは自ずとその責任の重さは異なる。「規範意識の低下」を嘆き、親や教師、あるいは当事者の中・高校生を非難する前に、五〇代を迎え、超高齢社会の主役となる「団塊の世代」を始めとする先を生きる者のあり方こそ問うべき課題ではないか。前項で紹介したMさんの「今更」〇〇〇は悪いこと、してはいけないこと「といくらメディアがメッセージを発しても、実感を伴わない言葉は彼ら彼女らには届かない」との指摘を自己の課題として問い直すことから始めるしかないことを、「団塊の世代」の一人としての自戒を込めて指摘しておきたい。

しておかねばならない。

テスト、教材、資料、椅子、机、コンピューター……すべて商品である。何よりも教科書は教科書会社がつくった商品。しかし、学校の外の商品と決定的に違う性格がある。それを消費するものが選択できないことである。学校は消費文化を取り込みながら、選択の契機をとりさつた商品のみを子どもたちに与えつづける制度といえばいいすぎか。この点では家庭も同型であろう。幼児期から親や祖父母が与える育児のための商品に自己を委ねることを求められ、学校に入ってから、学校が与える商品にアイデンティファイすることを強制される。それも、自ら進んで、感謝の心をもつて。

貧しき日本が世界の経済大国へと成長する上で間人主義は大きな役割を果たした。パーソナリティの基本型を学校教育が再生産し続けた結果でもある。そのオモテの成果が、経済成長を担った「団塊の世代」であろう。だが、今、「団塊の世代」は、第二節で指摘したように、自らの存在基盤をゆるがす選択肢の前でとまどっている。その子どもである「団塊ジュニア」も自立をまえにして、激変する社会の側が要請するパーソナリティと自己のアイデンティティとのズレにとまどっている。その先輩の「少産世代」もまた、家庭と仕事の狭間で選択を強いられとまどっている。中・高校生の選択を回避する友への同調を揶揄できる者は誰もいないはず。それはまさに鏡に写った自己の姿ではないか。

- 1 ○……………韓国の青少年文化については次の拙稿を参照いただきたい。「日本と韓国における青少年文化の意識構造の比較研究(その1)」『静岡学園短期大学研究報告 第5号』一九九七年。「韓国における日本大衆文化の調査研究(1)」『静岡大学教育学部研究報告(人文・社会科学篇) 第四九号』一九九九年。「韓国における日本大衆文化の調査研究(2)」『静岡産業大学 国際情報学部 研究紀要』第一号 一九九九年。
- 2 ○……………中西新太郎編『子どもたちのサブカルチャー』旬報社 一九九七年。宮台真司 石原英樹 大塚明子『サブカルチャー神話解体』パルコ出版 一九九三年。M・フェザーストン『消費文化とポストモダニズム』恒星者厚生閣 一九九九年。
- 3 ○……………少子化については次の拙稿を参照いただきたい。「少子時代の親子の世界」第三文明社 一九九七年。
- 4 ○……………『少年ジャンプ』と子どもの関係については次の拙稿を参照いただきたい。「なぜ子どもは『少年ジャンプ』が好きなのか」明治図書 一九九四年。
- 5 ○……………浜口恵俊『間人主義の社会 日本』東洋経済新報社 一九八二年。
- 6 ○……………本調査の詳細は次の報告書にまとめられている。静岡県青少年問題協議会 静岡県教育委員会『青少年の生活に関する意識調査報告書』一九九九年。なお、一九九九年一月に、財団法人中央教育研究所にて「中学生の生活とメディアに関する調査」を全国の中学二年生を対象に実施し、調査結果を現在分析中である。その過程で本稿で指摘した点は全国的にも確認できる。

本文注記

参考文献

- ……………馬居政幸『少子時代の親子の世界』第三文明社 一九九七年。
- ……………馬居政幸『なぜ子どもは『少年ジャンプ』が好きなのか』明治図書 一九九四年。
- ……………中西新太郎編『子どもたちのサブカルチャー』旬報社 一九九七年。
- ……………浜口恵俊『間人主義の社会 日本』東洋経済新報社 一九八二年。

- ……………宮台真司 石原英樹 大塚明子『サブカルチャー神話解体』パルコ出版 一九九三年。
- ……………M・フェザーストン『消費文化とポストモダニズム』恒星者厚生閣 一九九九年。
- ……………静岡県青少年問題協議会 静岡県教育委員会『青少年の生活に関する意識調査報告書』一九九九年。